

2021 年度

関西学院大学 ボランティア活動支援センター
ヒューマン・サービス支援室

Volunteer Activity Office "Human Service" Support Office



関西学院大学
KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY

2021 年度

関西学院大学ボランティア活動支援センター

ヒューマン・サービス支援室 活動報告書

関西学院大学 ヒューマン・サービス支援室

■ はじめに

ボランティア活動支援センター長 挨拶	2
富田 宏治	
ヒューマン・サービス支援室長 挨拶	3
関 嘉寛	
ボランティアコーディネーター 挨拶	4
岡 秀和、小林 真綾	
2021 年度学生コーディネーター代表 挨拶	5
西宮上ヶ原・西宮聖和キャンパス 墨谷 遼介	
神戸三田キャンパス 赤畑 清花、井吹 未奈	

■ ヒューマン・サービス支援室

1. ヒューマン・サービス支援室とは	8
学内における位置づけ	
組織図	
2021 年度の取り組み	
2022 年度の計画	
2. ボランティアコーディネート	11
支援室の利用状況（西宮上ヶ原キャンパス、神戸三田キャンパス、オンライン）	
外部団体からの情報提供数	
3. 情報発信	13
ホームページ、SNS	
ニュースレター vol.4	
4. 災害支援・防災啓発	14
オンラインガイダンス アナタにもできる災害支援を発見しよう！	
災害ボランティア養成講座 オンラインワークショップ	
武雄市水害被災地ミニ報告会	
5. 地域連携	16
地域・学校と繋がろう！～関西学院大学の2つの支援室 × 大学生 × 地域活動団体～	
6. SDGs 啓発	17
食品ロス削減の実践例から知る！今だからこそ、できること	
食べ残し NO ゲーム体験会	
7. 関西学院大学ボランティアネットワーク（KG-VNET）	18
新歓・新メンバー募集、ここがツボ！～ボランティアサークル・団体の魅力を伝えるコツとは？～	

■ 学生コーディネーター

1. 学生コーディネーター（学生 CO）とは	20
概要	
2021 年度年間目標	
2. 学生コーディネーターの活動	21
所属人数	
年間活動スケジュール	
情報発信	
春ボラ	
START UP KSC！～はじめようボランティア！ボランティア説明会 & なんでも相談コーナー～	
ボランティア EXPO	
動画制作「今ってどうなん！？ボランティア！」学生 CO がインタビュー！	
防災食ぐらんぷり（三田 CO 企画）	
関学ボラマップ（3 年生 CO 企画）	
コロナ禍で今私たちにできること～関学生の家にある本で全国に医療物資を届けたい～（2 年生 CO 企画）	
ボランティア week	
学生 CO 総会	
3. 研修	29
基礎研修	
コーディネーション研修	
4. 来年度に向けて	31
2022 年度学生コーディネーター代表 挨拶	
西宮上ヶ原・西宮聖和キャンパス 中岩 瞳	
神戸三田キャンパス 菊池 美輝、前田 蒼太郎	

■ 災害支援フォーラム

熊本地震現地ボランティア 活動概略、活動参加者数	34
開催趣旨・プログラム	37
第 1 部 現地ボランティア活動参加学生による活動報告「私たちと益城町の 4 年間」	40
第 2 部 パネルディスカッション「継続的な活動が生み出した学生と被災者の新たな支援の形」	48
第 4 部 室崎益輝氏による今後の展望・まとめ「学生ボランティアが被災地に関わる意味」	58
災害支援フォーラム実行委員 感想	61

■ 記録事項

災害支援フォーラム	64
ボランティア活動支援センター規程	66
ヒューマン・サービス支援室規程	67
ボランティア活動支援センター名簿	68
ヒューマン・サービス支援室名簿	68
2021 年度 学生コーディネーター代表部名簿	68

はじめに



ボランティア活動支援センター長

富田 宏治 (法学部教授・副学長)



2020年度に引き続き2021年度も、新型コロナウイルス感染症の広がりのなかで明け、大阪・兵庫の感染拡大の終息の見通しが見出せない中で暮れました。世界全体で630万以上もの人びとの尊い生命が失われ(2022年6月時点)、各地で医療崩壊が進行するとともに、ロックダウンや営業自粛要請等により無数の人びとが仕事と収入を失い深刻な困窮状態に陥りました。本学学生も決して例外ではなく、社会福祉協議会等によるフードバンクの取り組みに数百名の学生が列をつくるなど、アルバイトの激減や保証人の家計急変等によって日々の食糧にすら事欠く事態も広がっていたのです。

2020年度前半のキャンパスの閉鎖や、その後1年半に及ぶオンライン授業の継続、「三密」回避のための活動制限等で、ヒューマン・サービス支援室の活動も大きく制約をうけ、2021年度もまた思うにまかせない状況がつつきました。しかしそのような中でも、学生コーディネーターをはじめ多くの学生諸君が、オンライン環境を最大限活用しながら工夫を凝らして、その活動をねばり強く継続してくれました。ボランティア活動支援センター2021年度活動報告書は、未曾有のパンデミックに直面しつつ、これに真正面から向き合いながら本学のボランティア活動の伝統を継承しようと奮闘する本センター及びヒューマン・サービス支援室のささやかな活動記録となっています。

本学には、関東大震災への支援活動をはじめ災害支援活動に携わってきた長きにわたる歴史があります。近くは1995年の阪神・淡路大震災を契機として、本学学生・教職員のボランティア組織としてヒューマンサービスセンターが発足。以来20年以上にわたり活動して参りました。これらの伝統を引き継ぎ、2016年4月にはボランティア活動支援センター及びヒューマン・サービス支援室が設立され、大学の責任のもと学生諸君のボランティア活動の支援を行なうだけでなく、学内のボランティア活動団体相互の連携をはかる態勢も整えられました。

未曾有のパンデミックという「災害」の中、多くの人びとが困難に直面し続けているいま、ボランティア活動支援センターとヒューマン・サービス支援室の本領がまさに問われようとしています。さまざまな制約を克服し、学生諸君と関係者の皆さんの安全確保を優先しながら、本学におけるボランティア活動の真髄をどのように発揮していくのか。その課題の大きさと困難さを自覚しつつ、ポスト・コロナにおける新たな発展を展望し、着実に前進して参りたいと思います。

ヒューマン・サービス支援室長

関 嘉寛 (社会学部教授)



私たち関西学院大学ボランティア活動支援センター ヒューマン・サービス支援室（以下、支援室）は2016年4月の設立から早いもので6年が経ちました。この6年間、事務局は3度の異動があり、専従コーディネーターも入れ替わりがありました。また、教員も3度の入れ替わりがありました。入れ替わりの多い中でも、多くのご支援・ご指導と専従コーディネーターや事務局の尽力により、組織の基礎作りを進めてきました。そこで、2021年度は新しいフェーズに入るために、中期目標を立てることにしました。

この中期目標を考えるプロセスにおいて、支援室が6年間かけて築いてきた基礎体力が明らかになりました。一つは、学生コーディネーターを組織化してきたということです。彼らの主体性と意欲を大学内外でボランティア活動を広げる動きにつなげることができたと思います。第二には、学内において一定の認知度を果たということです。ボランティアは、大学における課外活動の重要な活動であり、それを支える組織が必要であるという認識をさまざまなイベントを通じて学内に広げることができたと思います。そして第三に、これらの活動を支える、専従コーディネーターや事務局体制を作ることができた実感しています。

ただ、2021年度も前年度に引き続き、新型コロナウイルス拡大の影響により、多くの支援室の活動に制限がかかりました。大変な状況でしたが、その中でも学生コーディネーターが工夫をしながら、自分たちのできることを探し、ボランティアの機会を作り出そうとしてきました。これらの内容については、本文中で詳しく報告させていただきます。

また、2021年度は、神戸三田キャンパスや西宮聖和キャンパスでの活動も広げることができました。それぞれのキャンパスにはそれぞれの個性があり、それに応じた支援室のあり方を模索する1年でもありました。関西学院大学に集うすべての学生たちにボランティアという経験を通して大学での学びをより深め、広めてほしいと思い、活動してきました。

このように、これまで5年間の実績を継承しながら、新しい挑戦や次のフェーズへの準備をした1年になりました。そして、あらためて、みなさまのご指導やご支援を実感しました。

本報告書は、私たち支援室の1年の悪戦苦闘の記録です。新型コロナウイルスへの対応も落ち着きはじめ、withコロナの時代に合った支援室のあり方を考え、実践していきたいと思っています。ぜひみなさんと共有しながら、学生たちに意義深い学生生活を提供する方法を考えていけたらと思っています。ぜひ、ご意見やご感想などもいただければ幸いです。みなさまのますますのご支援・ご指導のほどよろしく申し上げます。

ボランティアコーディネーター

岡 秀和



2021年度は、2020年度に引き続き新型コロナウイルス感染症の影響を受ける1年となりました。しかし、コロナ禍でも何かしたいという学生の皆さんの思いを受け止めるべく、「ボランティアEXPO」「ボランティアweek」などの企画は感染対策を徹底して対面で行ったほか、オンラインでもイベントを開催するなど、ひとりひとりに寄り添った形でボランティア啓発を行いました。

私は主に神戸三田キャンパスを担当しました。より活動を活性化するために、これまで週2回だった開室を週3回に増やし、三田キャンパス独自の企画（防災食ぐらんぷり等）も行うなど、積極的に活動の幅を広げていきました。学生CO代表を務めた赤畑さん・井吹さんを中心に、三田学生COは全員が主体的に活動に関わることができました。2022年度は三田キャンパス独自の動きをさらに増やし、一般学生や関西学院大学ボランティアネットワークに加入する団体も巻き込んで様々な企画が実施できればと思います。

また、2019年度で活動を終えた「熊本地震現地ボランティア」の総まとめとなる災害支援フォーラムも、オンラインではあったものの、無事開催することができました。活動でお世話になった宮崎さんや佐藤さんと共に活動の意義を振り返れたこと、実行委員を中心に学生自身が活動の意義をじっくり考える機会ができたことは、学生の皆さんはもちろん私たち大学関係者にとっても大きな学びとなりました。これで終わりではなく、学生の皆さんとできることを考え続けたいと思います。

活動を止めることなく、一つ一つできることを創り上げ、積み重ねてきた1年になりました。2022年度は地域や学内組織・団体との関わりを増やし、さらなる飛躍を目指す1年にできればと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

ボランティアコーディネーター

小林 真綾



ボランティア活動支援センター、ヒューマン・サービス支援室が開設してから6年が経ちました。新型コロナウイルスの影響によって活動が制限される部分もありましたが、コーディネーションや、様々なイベントを感染対策を徹底することで対面で実施することができました。制約が続く中でも、学生COは活動を止めないために代表部を中心にMTGを重ね、学年企画として3年生は関学ボラマップの作成、2年生は古本回収企画など新たな形でのボランティア啓発に取り組むことができました。

一部の対面授業も再開され、イベントの他に授業やチャペルに登壇し活動紹介をさせていただく機会も増えました。支援室の認知度も上がり、前年に比べて支援室の利用者も少しずつ回復してきました。「コロナ禍でもできることはありますか?」と来室する学生も多く、このような状況下でもボランティアに挑戦したいと思っている学生がいることは、支援室として新たなアクションを起こす糧になったと思います。

コロナ禍でも学生COと協働し、自分たちにできることは何かを考えながら進み続けることができた1年間でした。来年度もより多くの学生にボランティアに挑戦するきっかけや機会を掴んでもらえるよう学生COと教職員が一体となって活動に取り組んでいきたいと思っています。2022年度もどうぞよろしくお願いいたします。

2021年度学生コーディネーター 西宮上ヶ原・西宮聖和代表

墨谷 遼介 法学部3年



2021年度は2020年度に続き、新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受ける1年となりました。依然としてオンライン中心の活動を迫られ、学生COがどう工夫して活動していくかを試される1年となりました。

こうした中で、前年度から様々な方法を模索し続けた学生COメンバーの力が大いに発揮されたと実感しております。オンライン活動はより密度が濃くなり、前年度の「変化に食らいつく」活動から「変化を乗り越えろ」活動に発展させることができました。また、制限レベルが大きく改善された秋学期の活動では、これまで蓄積され続けたメンバーたちの対面活動への熱い想いが大きく花開き、初めての試みやより充実した企画に挑戦することができました。困難の多い1年においてこれだけのチャレンジができたことは、メンバーにとっても非常に大きな自信になったと感じております。

コロナ禍は終わりが見えず、今後も我慢しながらの活動が続くでしょう。しかし、この1年間で活動の可能性を大きく広げた学生COは、柔軟な活動を通じてボランティアと多くの人々を結びつけてくれると確信しております。下級生たちがこれからの学生COの活動をより実りあるものに発展させ、そして何より活動を大いに楽しんでくれることを切に願っております。1年間ありがとうございました。

2021年度学生コーディネーター 神戸三田共同代表

赤畑 清花 総合政策学部3年

井吹 未奈 理工学部3年



2021年度は、2020年度と同様に新型コロナウイルスの流行の影響を受けつつも、新メンバー7人を加え、神戸三田キャンパスの学生コーディネーターにとって大きな飛躍の年になったと考えています。

まず、新入生向けのボランティア説明会では、参加者もCO自身にとっても「笑顔になれる会にしたい」という思いからサイコロを用いた学生COのトークコーナーを取り入れることで、より支援室や学生CO、ボランティアに親しみを持ってもらうことができました。実際に、この説明会を聞いたことがきっかけで、新たな学生COの仲間になってくれたメンバーが多くいたことは、私たちの活動に対する自信と「やりたいことをやってみる」姿勢につながりました。

また、個人目標を立てて活動することで、それぞれのメンバーが主体的に活動することができるようになりました。各メンバーが今の学生COに必要なことを考えることにつながり、神戸三田キャンパス独自の活動を実現することができました。例えば、自分たちで防災食の組み合わせを考えて、魅力的なセットを投票で選ぶ「防災食ぐらんぷり」というイベントを実施することができました。

2022年度以降も、2021年度に得られた経験を活かして、神戸三田キャンパスの学生コーディネーターの活動を通じて、ボランティアの魅力をより伝えていくことができるよう努めてまいります。

ヒューマン・サービス支援室



1. ヒューマン・サービス支援室とは

学内における位置づけ

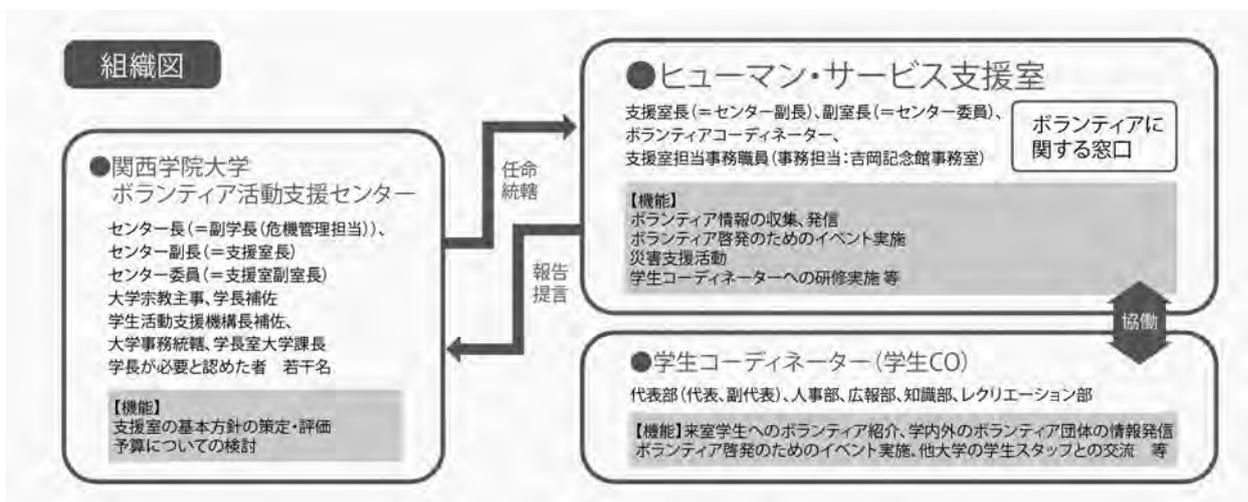
関西学院大学ボランティア活動支援センター、ヒューマン・サービス支援室（以下、支援室）は、大学内におけるボランティアセンターの役割を果たす部署として2016年4月に設置されました。

支援室の母体になったのは、1995年阪神・淡路大震災後に設立された関西学院ヒューマンサービスセンター（HSC）です。HSCでは、教職員と学生が協力して、さまざまなボランティアコーディネートを行っていました。

しかし、HSCは、関西学院大学内におけるボランティア活動の組織的な支援という点において課題を抱えていました。このような課題に対応するために、何年間かにわたる学内協議の末に、大学内に位置づけられた組織として支援室が開設されました。

支援室は、関西学院大学のスクールモットーである“Mastery for Service”を体現するボランティア活動を、さらに広げ、多くの学生が参加できる環境作りをミッションとしています。そのために、ボランティア情報の発信や共有を中心に、ボランティアをしたい学生とボランティアをしてほしいニーズをつなげていく活動を行っています。その過程では、活動している人びと、活動したい学生たちの自主性を尊重することを大切にしています。

また東日本大震災での大学の組織的な支援を再考し、発展させることもヒューマン・サービス支援室に課せられたミッションです。関西学院大学では、関東大震災時もボランティアを現地に派遣しているほど、災害救援において伝統があります。この伝統を受け継ぎ、災害が多発する現代社会において、被災者や被災地に寄り添う活動を組織的に行いたいと考えています。



2021年度の取り組み

設立から6年目に入る2021年度は、過去5年の活動の課題を見直し、さらなる発展に向けて下記の取り組みを行いました。

重点事項	取り組み内容	活動内容
支援室の学内ネットワークの拡充	社会連携センター、国際連携機構（CIEC）、実践教育支援室、災害復興制度研究所など関連部署との連携	学内でのネットワークを広げるため、ボランティアと関連のある部署との懇談を実施しました。各部署での事業内容を確認し、情報共有や連携ができる関係づくりを行いました。
神戸三田キャンパス（KSC） 西宮聖和キャンパス（NSC） での活動	学生団体やキャンパス事務室との連携	支援室主催のイベントを行う際に、KSCではキャンパス事務室と連携し、円滑に実施できるようになりました。NSCでの活動も少しずつ拡大しているところですが、キャンパス事務室やキャリアセンターとは密に情報共有を行うことができず、課題が残りました。
	ボランティアに関するイベントの実施	各キャンパスの学生COが中心になり、複数のイベントを実施することができました。KSCは学生COの人数も増え、キャンパス独自の新たな企画も実施しました。
	開室場所の継続、開室日程の拡大（KSC）	2020年度までは週2回の開室を2021年度から週3回に増やし、認知度も少しずつ上がってきました。コロナ禍でも多くの学生に支援室を利用してもらうことができました。
学生COとの協働 （学内外へのアプローチの強化）	年間スケジュールに沿ったイベントのコロナ禍での開催方法を検討	一部、対面活動が再開され、消毒や人数制限など感染対策を徹底した上でイベントを実施しました。またオンラインも併用するなど工夫を凝らし、状況に合わせて企画を検討しました。
	自主企画の支援	コロナ禍で学生CO同士でのコミュニケーションを取ることが難しい中でも、様々な企画を検討し、実施しました。レクリエーションやコーディネーションの練習、企画の立て方など様々な種類の企画が生まれました。
	学年企画の支援	初めての試みでしたが、2年生は古本回収企画、3年生は「関学ボラマップ」の作成をしました。コロナ禍でもできることに取り組みたいという思いで、関学生にボランティアの啓発ができました。
学外組織とのネットワークづくり	各地域・地区の社会福祉協議会との連携	三田市社会福祉協議会に伺い、今後の連携についてお話をいただきました。また、西宮市社会福祉協議会とは「ボランティアweek」のトークセッションを一緒に行ったことをきっかけに、情報交換や連携を深めています。
	西宮市内地域団体との関係性づくり	オンラインで人間福祉学部実践教育支援室とNPO法人なごみと共催で交流会を実施しました。西宮市内では多くの地域団体が活動されており、来年度以降の交流や関わりについても検討する機会となりました。
災害対応の確立・準備	関係団体との連携の継続・強化	西宮市社会福祉協議会と認定NPO法人日本災害救援ボランティアネットワーク（NVNAD）と情報交換を行うことができました。しかし、コロナ禍のため昨年に引き続き現地での支援活動はできませんでした。また、新たに災害支援団体と関係性を構築することはできなかったため、来年度の課題としました。
	講座やワークショップを通じた災害支援・防災・減災関連活動	昨年は実施ができなかった「災害ボランティア養成講座」については、開催方法を検討し、ガイダンスとワークショップの2つに分けてオンラインで実施しました。コロナ禍でも災害に関心を持っている学生に自分ができることを考える機会を提供することができました。
	学生による自主的な災害支援・防災・減災関連活動の支援	災害復興制度研究所の齊藤容子先生をお招きし、武雄市水害被災地ミニ報告会を実施しました。報告会をきっかけに何かしたいという有志学生が集まり「関西学院大学災害コミュニティつむぎ」が発足しました。来年度は災害講座等で連携していく予定です。

2022 年度の計画

2021年度の振り返りから、重点的に取り組む活動は次の通りとしました。

重点事項	取り組み内容
KSCでの活動の活性化	学生団体やキャンパス事務室との連携
	活動場所の充実化
広報戦略の見直し	印刷媒体での広報資料の整理
	HP、kwic（学内ポータル）での発信の整理
	ブランディングの検討
学生COとの協働	研修の充実化
	個別のコミュニケーション
災害対応の確立・準備	災害救援、復興支援活動のプラットフォームづくり
	災害発生時の対応整理

2. ボランティアコーディネート

支援室の利用状況

2021年度は新型コロナウイルスの感染拡大により、春学期は対面でのボランティア情報の紹介は停止し、主にオンラインでのボランティア活動や本学の学生が活動しているボランティア団体・サークルの紹介を行いました。10月からは対面での活動紹介も再開しました。神戸三田キャンパスでも授業期間中のみ週に3回開室し、情報紹介等を行いました。また、2020年度から引き続き、オンラインでの情報紹介・相談対応も行いました。

【西宮上ヶ原キャンパス】

月別来室者のべ数

(人)

月	ボランティア紹介	ボランティア団体相談	その他	合計
4月	15	0	2	17
5月	8	4	2	14
6月	9	0	2	11
7月	5	0	4	9
8月	4	0	0	4
9月	3	0	0	3
10月	7	0	0	7
11月	7	0	0	7
12月	6	3	5	14
1月	2	1	11	14
2月	2	0	0	2
3月	5	0	0	5
合計	73	8	26	107

【オンライン】

月別相談者のべ数

(人)

月	ボランティア紹介	ボランティア団体相談	その他	合計
4月	2	0	0	2
5月	0	0	0	0
6月	3	1	0	4
7月	3	4	0	7
8月	3	0	0	3
9月	1	0	0	1
10月	2	0	0	2
11月	2	0	0	2
12月	0	0	0	0
1月	1	0	0	1
2月	3	0	0	3
3月	2	0	0	2
合計	22	5	0	27

【神戸三田キャンパス】

月別来室者のべ数

(人)

月	開室回数	ボランティア紹介	ボランティア団体相談	その他	合計
4月	4回	1	7	1	9
5月	10回	3	0	2	5
6月	14回	0	0	3	3
7月	12回	0	0	0	0
9月	4回	0	0	0	0
10月	12回	5	0	2	7
11月	11回	7	4	10	21
12月	11回	13	4	7	24
1・2月	10回	2	2	0	4
合計	88回	31	17	25	73

【利用者内訳（Welcomeシート記入者分）】

*Welcomeシートとは、支援室に来室した学生に記入してもらっているシートで、興味があるボランティアのジャンルを√してもらうことでボランティア紹介に活用しています。

(人)

キャンパス	西宮上ヶ原									神戸三田						西宮聖和	合計
	神	文	社会	法	経済	商	人間福祉	国際	その他	理工	総合政策	理	工	生命環境	建築		
1年生	2	2	7	4	5	0	3	3	0	0	12	1	3	1	4	4	51
2年生	0	2	1	5	2	9	3	0	0	1	10	0	0	0	0	2	35
3年生	0	1	2	7	0	3	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	15
4年生	0	2	0	0	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	1	6
研究科	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	3
合計	2	7	10	16	8	12	8	3	4	3	23	1	3	1	4	7	112

※Welcomeシートを記入していない学生や、複数回来室した学生は1枚しかシートを記入していないケースがあるため、来室者のべ数と利用者内訳で人数が違ってきます。また、学生COは来室者数としてカウントをしていません。

※その他は上記学部以外の研究科、科目等履修、教職員等です。

外部団体からの情報提供数

支援室では、提供していただいたボランティア情報を20種類のジャンルに分けて紹介しています。ジャンルは、1つの情報に対して最大3つまで選択しています。

ジャンルごとの情報件数

(件)

子ども・青少年	子どもたち、中高生などに関わる活動（キャンプ、子ども食堂、子どもたちの工作サポートなど）	43
教育	主に教科指導（勉強）に関わる活動（学校内での児童・生徒支援事業、塾での勉強支援、学習支援活動など）	26
福祉（障がい）	障がいがある方の余暇活動の同行、支援施設での活動など	25
福祉（高齢）	高齢者と関わる活動（介護施設での活動など）	5
医療・保健	献血、病院でのボランティア活動、心に病を持つ人への支援活動など	0
国際	国内外問わず、海外の方と関わる活動（海外での支援活動、国内での日本語教育支援活動など）	15
環境	環境保護・保全に関わる活動（植林活動、ごみゼロ運動、清掃活動、水質保全活動など）	27
動物	動物保護、生態系の再生・保全活動など	0
芸術・文化	美術館・博物館での活動、音楽祭のサポート、地域文化の保全活動など	5
スポーツ	スポーツに関わる活動	9
災害支援	防災活動、災害時の救援・支援活動、災害記念式典の運営など	16
まちづくり	地域住民と関わる活動、地域PR活動、まちあるきの運営など	11
祭り・イベント	お祭りや行事の運営、お手伝いなど	16
人権	難民・難病がある方の支援や権利擁護活動など	5
スタディツアー	参加者と現地の人々の相互理解や体験学習を目的とする活動（平和学習、文化体験など）	2
オンライン	Zoomなどのwebシステムを利用して在宅で参加できる活動など	38
講座・セミナー	講演会、勉強会、ワークショップなど	28
寄付・募金	団体への支援金、災害時の義援金など	0
学内団体	関西学院大学内で活動やミーティング等を行っている団体	6
その他	上記にあてはまらないボランティア活動	21
	総計	298

月別情報件数

4月	45件	
5月	6件	
6月	10件	
7月	11件	
8月	8件	
9月	5件	春学期合計 85件
10月	10件	
11月	13件	
12月	12件	
1月	9件	
2月	5件	
3月	21件	秋学期合計 70件
総計	155件	

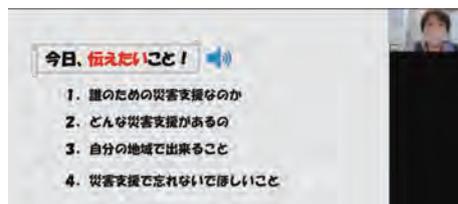
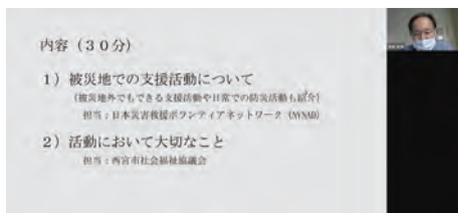
4. 災害支援・防災啓発

2021年度、静岡県熱海市での土石流など大きな災害が発生しました。ヒューマン・サービス支援室としては災害発生時の支援検討フローに基づき、学内外から情報収集を行い、最新情報が得られる全国社会福祉協議会のホームページへのリンクを支援室ホームページに掲載する、被災地域で活動を検討している学生に対してコロナ禍での活動に関する注意喚起をするなどを行いました。昨年に引き続き、直接的な支援は実施できませんでしたが、コロナ禍での被災地の状況を知る機会などを設け、自分たちにできる事は何か考えることができました。

2016年～2019年までの4年間行われていた熊本地震現地ボランティアの集大成として災害支援フォーラムを実施しました。当初2020年度に実施予定でしたが、コロナ禍のため延期になり、2021年度10月にオンラインでの開催となりました。フォーラムの詳細については37ページをご覧ください。

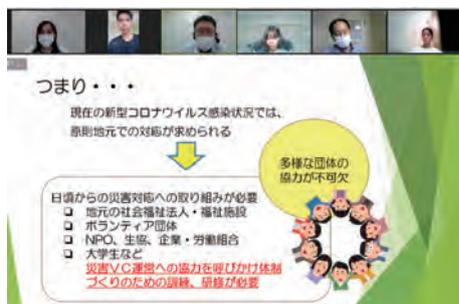
また2020年度には実施できなかった「災害ボランティア養成講座」は、西宮市社会福祉協議会と認定NPO法人日本災害救援ボランティアネットワーク（以下、NVNAD）と開催方法を検討し、ガイダンスとワークショップをオンラインにて開催しました。

オンラインガイダンス アナタにもできる災害支援を発見しよう！



- 日 程**：2021年9月2日（木）11：00～11：40
場 所：Zoomによるオンライン開催
参加者数：21人
講 師：西宮市社会福祉協議会ボランティアセンター
 認定NPO法人日本災害救援ボランティアネットワーク
内 容：災害ボラの基礎知識や注意点、これまでの支援活動についてお話を聞く
目 的：災害支援とはどのようなものなのか基礎的な知識を学ぶ。近年災害が多く発生している中で災害ボランティアについて学び災害への関心を継続させる。災害支援をきっかけに広くボランティアに興味を持つきっかけをつくる。災害支援に興味はあるが、何もできないと思っている学生にアプローチする。

災害ボランティア養成講座 オンラインワークショップ



日 程：2021年9月15日（水）13：30～15：30

場 所：Zoomによるオンライン開催

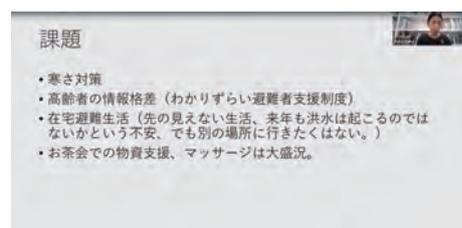
参加者数：5人

講 師：西宮市社会福祉協議会ボランティアセンター
認定NPO法人日本災害救援ボランティアネットワーク

内 容：災害ボラの基礎知識や注意点等
これまでの支援活動の説明、災害ボランティアの基礎知識など

目 的：関西で災害が発生したときに、どのような行動をとる必要があるのかを考える。
コロナ禍で災害が起こった際に、自分たちにできる支援や行動について意見交換をしながら考える。
災害ボランティアについて学び災害への関心の継続をさせる。

武雄市水害被災地ミニ報告会



日 程：2021年11月8日（月）11：00～12：00

場 所：対面 災害復興制度研究所
オンライン Zoom

参加者数：7人（全員オンライン参加）

講 師：災害復興制度研究所 齊藤 容子 主任研究員

内 容：武雄市の現状について説明
学生からの質疑応答、感想等共有

目 的：被災地でのボランティアに関心のある学生が多いが、コロナ禍で被災地に行けないという現状がある。現地支援に行けない中で、まず現地の状況について知り、自分たちにできる事は何かを考える。

5. 地域連携

これまであまり着手できていなかった西宮地域での地域連携について模索していたところ、西宮市東鳴尾町で地域交流拠点の運営や地域福祉の活動を行うNPO法人なごみの田村幸大さんと繋がることができました。田村さんの提案をもとにまずは地域団体と大学、地域住民と学生が顔を合わせる機会をつくろうということで、オンラインでイベントを開催しました。

また、ボランティアweekのトークセッション（P27）で西宮市社会福祉協議会共生のまちづくり課の中川俊亮さんにご登壇いただいたことがきっかけで繋がりができたり、三田市社会福祉協議会のボランティアセンターと懇談の機会を持つことができたりと、社会福祉協議会の皆さんと顔が見える関係性ができました。今後、連携しながら具体的にできることを考えていきたいと思えます。

地域・学校と繋がろう！～関西学院大学の2つの支援室 × 大学生 × 地域活動団体～



- 日 程：**2022年2月24日（木）17：00～18：30
場 所：Zoomによるオンライン開催
参加者数：地域団体17人（12団体）、学生12人、教職員7人、卒業生1人
共 催：人間福祉学部実践教育支援室、NPO法人なごみ
内 容：ヒューマン・サービス支援室、実践教育支援室紹介
 キャンパス紹介 生中継
 地域活動団体紹介
 つながろう！交流タイム

目 的：

- （大学側）支援室の活動やボランティア募集方法、実習連携方法等を知ってもらう。支援室として西宮地域の団体を知り、今後の地域ネットワークと学生の繋がりを考えるきっかけにする。
- （地域側）学生や大学のことを知ることで、地域はどんな場や機会を提供でき、共に関わられる機会を作れるかを考えるきっかけにする。

6. SDGs 啓発

社会課題の解決に向けた取り組みの実践という観点から、ボランティアと同じく SDGs の活動に関学生が関わることは非常に重要だと考えています。2021 年度は 2020 年度から継続して「食べ残し NO ゲーム体験会」を実施しました。この体験会は NPO 法人 DeepPeople が提供しており、ゲームを通じて食品ロス問題と向き合うことができるものです。また、With コロナのボランティアガイダンスとして「食品ロス削減の実践例から知る！今だからこそ、できること」を実施しました。実際にアクションを起こしている学生の生の声を届ける機会となりました。

食品ロス削減の実践例から知る！今だからこそ、できること



日 程：2021年7月15日（木）12：50～13：20

場 所：Zoomによるオンライン開催

参加者数：学生39人、教職員2人

ゲ ス ト：NPO法人DeepPeople 中尾 榛奈氏

内 容：初めてでも気軽に挑戦できる“オンラインボランティア”について

コロナ禍で大学生や学生サークルが取り組んでいる活動事例の紹介

食品ロスやSDGsに関連した活動の実践例

目 的：「コロナ禍だからできない、やらない」ではなく、「コロナ禍だからこそこれをやろう！」という動機から始まった様々な取り組みについて知ること、自身にも今できることを考える。

食べ残し NO ゲーム体験会



日 程：①2021年8月5日（木）13：30～15：00

②2022年3月3日（木）13：30～15：00

場 所：① Zoomによるオンライン開催

② 西宮上ヶ原キャンパスH号館302教室

参加者数：学生15人、教員2人（① 9人、② 8人）

共 催：NPO法人DeepPeople

内 容：食べ残しNOゲームについて知る
ゲーム体験、開発に至るまでのストーリー
食品ロスについて知る
食品ロスとは、数字で見る食品ロス、解決に向けて行っていること

食品ロス削減活動の紹介

自らできることの検討

目 的：日常生活でできる社会貢献の取り組みの例として、食品ロス問題とその削減について考えるきっかけとする。また、体験会のオンライン化については、オンラインボランティアが意見を出し合うことで完成させたという背景を伝えることで、コロナ禍でできるボランティア活動の事例を知る機会とする。

7. 関西学院大学ボランティアネットワーク (KG-VNET)

関西学院大学のボランティアの活性化のために、関学生がボランティア団体に所属し、主体的に活動することへの支援はとても重要なことだと考えています。そのため、ヒューマン・サービス支援室がとりまとめを行い「関西学院大学ボランティアネットワーク (KG-VNET)」をつくっています。ヒューマン・サービス支援室は加入団体の広報協力や活動運営の相談に乗る他、連携してイベントを開催する、団体間での交流会を実施するなど様々な形でサポートをしたいと思えます。

2021年度は2020年度に引き続き、春ボラやボランティア EXPO (P23、24 参照) などの学生 CO 企画を通じて各団体の新メンバー勧誘をサポートしたほか、募集の工夫を考えるためのワークショップを実施しました。

2021 年度加入団体

- 学生連盟加盟団体 (1 団体)
 - 関西学院大学 宗教総部
- 大学登録団体 (11 団体)
 - アイセック関西学院大学委員会
 - Eco-Habitat 関西学院
 - SSV 関西学院
 - 学習ボランティアサークル ALIVE
 - 関西学院上ヶ原ハビタット
 - CLUB GEORDIE
 - K.G.BrainHumanity
 - J-FUN ユース K.G.
 - 聖和キャンパス学生 YMCA
 - 乳幼児の遊び研究サークル 子どもの友
 - ほっとコミュニティ
- 学内団体 (8 団体)
 - ivusa 兵庫西宮クラブ
 - 学生国際協力団体 CUE
 - 関西学院大学 YMCA 神戸三田キャンパス

- CORs
 - 国内ボランティアサークルつなぐ
 - 日本手話サークルはなまる
 - HeForShe 関西学院大学
 - Bridge for Children, KGU
- 学外団体 (13 団体)
 - 一般社団法人京都すまいるプロジェクト
 - 一般社団法人 new-look
 - NPO 法人 good!
 - NPO 法人リーダーズカフェ
 - 学生団体 Infinite Connection
 - 関関 COLORS
 - 神戸ライフセービングクラブ
 - 適応教室 Pal たからづか
 - どんぐり文庫
 - 西宮地区 BBS 会
 - 西宮まちづくり連携プロジェクト
 - PENS
 - ボランティア・フレンド・メディア神戸 (VFM 神戸)

新歓・新メンバー募集、ここがツボ！～ボランティアサークル・団体の魅力を伝えるコツとは？～



日 程：2022年2月18日（金）13：00～15：30
場 所：Zoomによるオンライン開催
参加者数：学生12人（5 団体）
講 師：川中 大輔氏
 （シチズンシップ共育企画 代表 / 龍谷大学 講師）
内 容：よびこみ × まきこみの考え方について
 「らしさ」「強み」を活用した新歓の検討
 ボランティアモチベーション6つの動機
 各団体が取り組む活動のポイントについて 等
目 的：対面が制限される中で効果的なメンバー募集の打ち出し方
 や団体のPR方法を考える。参加団体それぞれの強みや入会
 後の定着に向けての工夫を共有し、互いに学びあう。また、
 講師による講演からボランティア組織のメンバー間でのコ
 ミュニケーションについて学ぶ。

学生コーディネーター

1. 学生コーディネーター（学生CO）とは

学生COは教職員と協働し、「関西学院大学のボランティアの活性化」を目的として活動している団体です。学生COの活動は大きく2つあります。

①ルーティン活動

支援室を訪れた学生とお話しながらその人に合ったボランティア情報の紹介（コーディネーション）をします。学生COそれぞれが授業の空き時間を使って実施しており、コーディネーションの他にも、ボランティア情報の整理やイベント準備なども行います。

②イベントの企画・実施

関学生にとってボランティアがより身近なものとなるように、様々なイベントを企画・実施しています。イベントを通じて学内でのボランティアの啓発やボランティアを始めのきっかけ作りなどを目的として楽しいイベントを企画しています。

2021年度年間目標

2021年度の目標は「Be ボラフルエンサーズ！」としました。「Be ボラフルエンサーズ！」とは、多くの人にボランティアに興味を持ってもらうために、ボランティアについてもっと広める人になろうという意味を込めました。ボランティアとインフルエンサーを組み合わせた言葉です。以上の年間目標を軸に、部署目標、企画目標、個人目標の3点についてそれぞれ具体的な目標を設定しました。

学生COの目的である「ボランティア活動の活性化」を達成するために、やるべきことを全員に考えてもらいました。そこで共通して出た意見が「ボランティアに興味のない人にも興味を持ってもらうこと」でした。そんな団体になるためのキーワードを出して決め、1年間活動しました。

1年間の活動の総括となる総会で3つの目標について振り返りました。

①部署目標について

所属する部署の目標は事前に部署内で振り返りを行いました。他部署に関しては、所属していないメンバーが表彰状を作成しました。表彰する側は他部署の活動を深く知ること感謝の言葉を贈ることができ、表彰される側はどのような形で学生COに貢献できていたのかが実感できました。

②企画目標について

実行委員として関わった企画の目標は事前に振り返りを行いました。総会では、実行委員以外の目線から振り返りました。担当していた企画を俯瞰的に見たり、実行委員としては関わっていなかった企画のことを深く考えたりすることで、改めてCOの企画を振り返ることができました。ターゲットや手段は違っても、全ての企画が年間目標の「ボラフルエンサーズ」としての役割を果たしていることを感じる事ができました。

③個人目標について

個人目標を3カ月ごとに振り返るシートを作成し、総会で1年間を振り返りました。今までの活動を自己評価し、どこに力を入れていたのかを明確にしました。それを全体で共有することで、見えないところでそれぞれが活躍していたことに気づきました。

2021年度は昨年度と同様、オンラインでの活動がメインとなりましたが、オンラインツールを駆使して、キャンパスを越えた繋がりを築き上げました。対面活動が再開しても、活動の目的に合わせてオンラインと対面を併用するなど、活動の幅を広げたいと思います。

2. 学生コーディネーターの活動

所属人数 (2021年6月14日時点)

(人)

キャンパス	西宮上ヶ原									神戸三田					西宮聖和	合計
	神	文	社会	法	経済	商	人間福祉	国際	理工	総政	理	工	生命環境	建築	教育	
1年生	1	0	1	4	3	0	2	0	4	0	2	0	1	1	19	
2年生	0	1	1	5	1	1	1	1	1	0					2	
3年生	0	2	4	5	2	1	1	1	1	5					0	
4年生	0	1	2	2	1	0	1	1	0	1					1	
合計	1	4	8	16	7	2	5	3	2	10	0	2	0	1	4	65

年間活動スケジュール

日程	内容	場所・ツール
2021年		
4月初旬	新入生オリエンテーション登壇、「春ボラ」配布	西宮上ヶ原キャンパス、神戸三田キャンパス、西宮聖和キャンパス 各教室等
4月7日(水)	START UP KSC! 出展 ～はじめようボランティア! ボランティア説明会&なんでも相談コーナー～	神戸三田キャンパスアカデミックcommons 1階シアター、VI号館202教室
4月14日(水)～16日(金) 20日(火)～22日(木) 26日(月)～28日(水)	ボランティアEXPO	西宮上ヶ原キャンパス 吉岡記念館ラウンジ、研修室1～4 神戸三田キャンパスII号館210教室 西宮聖和キャンパス ラーニングcommons 2階
4月～5月	学生CO新歓	オンライン (Zoom)
6月12日(土)	基礎研修	オンライン (Zoom)
6月16日(水)	動画制作「今ってどうなん!? ボランティア」学生COがインタビュー!	学生CO YouTubeチャンネル
8月25日(水)	防災食ぐらんぷり 防災食セット考案会	オンライン (Zoom)
11月15日(月)～19日(金)	コロナ禍で今私たちにできること ～関学生の家に本で全国に医療物資を届けたい～	西宮上ヶ原キャンパス 吉岡記念館ラウンジ 神戸三田キャンパス II号館210教室 西宮聖和キャンパス ラーニングcommons 2階
11月19日(金)	「関学ボラマップ」発行	オンライン (Zoom)
12月6日(月)～10日(金)	ボランティアweek ・支援室企画 オープニングイベント ボランティアについて楽しく知ろう! ボランティア関連図書の展示 あなたの知らないボランティアの世界 トークセッション 身近な同世代とつながるボランティア ～自身と仲間の孤立を防ごう～ ボラメッセージ博覧会 ・学生CO企画 クイズ&アンケート 動画制作 サクッとボランティアに触れてみよう! クローズングイベント ラジオ生放送『ボランティアってどんなイメージ!? 団体の方や学生の皆さんの声を聞いてみよう!』	西宮上ヶ原キャンパス、神戸三田キャンパス、西宮聖和キャンパス 各キャンパス内全域 オンライン (Zoom)
12月18日(土)	学生CO総会	オンライン (Zoom)
2022年		
1月6日(木)～20日(木)	防災食ぐらんぷり パネル展示&アンケート	神戸三田キャンパス アカデミックcommons インフォメーションホール
1月19日(金)	関西学院高等部3年生特別プログラム登壇	関西学院高中部 礼拝堂
2月28日(月)	防災食ぐらんぷり 結果発表(動画公開)	学生CO YouTubeチャンネル
3月31日(木)	コーディネーション研修	オンライン (Zoom)

情報発信

学生COは、ボランティアに関する啓発イベントの参加者募集や日常活動の発信のため、ヒューマン・サービス支援室とは別で、次の通り SNS アカウントを所有して情報発信をしています。

今年度は学生 CO のロゴを新たに作成し、SNS のアイコンやチラシの作成や広報で活用しました。

SNS (Twitter、Instagram、note)、YouTube

学生 CO ロゴ



学生 CO 広報用チラシ

学生コーディネーター & ヒューマン・サービス支援室

学生コーディネーター(学生CO)とは？

学生COは、「関西学院大学のボランティア活性化」を目的として活動している団体です！関学生にボランティアを紹介(コーディネート)したり、ボランティアのイベントの企画等をしています！

ヒューマン・サービス支援室とは？

関西学院大学のボランティアセンターとして、大学内外に向けてボランティアに関する情報の提供や活動についての相談に応じます！

場所
西宮上ヶ原キャンパス
正門左手・門衛室構

開室時間
平日 8:50~16:50
(11:30~12:30 は閉室)
※土日、祝日、夏季・冬季の一斉休業期間は終日閉室

連絡先
SNS
hg.hsco.info@kwansei.ac.jp

学生コーディネーター
hsco.coco04@gmail.com

上ヶ原

三田ver. / ヒューマン・サービス支援室 & 学生CO

ヒューマン・サービス支援室とは！？

支援室では、大学内外に向けてボランティアに関する情報の提供や活動についての相談に応じます！三田キャンパスでは2018年から開室しています。

学生COとは！？

学生コーディネーターの略称で、関学のボランティア活動を盛り上げるために、すべてのキャンパス合わせて62人で活動中！関学生にボランティアを紹介(コーディネート)したり、イベントの企画等をしています！

開室日: 毎週火・水・木
時間: 10:30~17:00
場所: II号館2階210号室
※授業実施期間中のみ

ココ!

ホームページ
Twitter
Instagram

三田

活動報告

春ボラ



掲載： 新入生へ配布

教学 web (学内ポータル) にてデジタルブックを公開

様式： PDF44 ページ (A4 判)

印刷部数：6,300 部

内容： ヒューマン・サービス支援室を含め、関学生が所属するボランティア団体 (上ヶ原：9 団体、聖和：3 団体、三田：7 団体、その他：10 団体) の活動内容、EXPO の情報などを掲載した「春のボランティア情報誌」を作成

- 目的：**
- ① 学生 CO とヒューマン・サービス支援室を認知してもらう
 - ② 関学生にボランティアの情報を届け、ボランティアを始めるきっかけにしてもらう
 - ③ ボランティアに興味のない学生にも春ボラを開いてもらい、ボランティア情報を届ける

掲載団体： ヒューマン・サービス支援室、学生 CO、その他 29 団体

- 学生連盟加盟団体 (1 団体)
 - HeForShe 関西学院大学
 - 宗教総部
 - CORs
- 大学登録団体 (10 団体)
 - 関西学院大学 YMCA 神戸三田キャンパス
 - アイセック関西学院大学委員会
 - 国内ボランティアサークルつなぐ
 - 学習ボランティアサークル ALIVE
 - Bridge for Children, KGU
 - K.G.BrainHumanity
 - 学外団体 (10 団体)
 - 一般社団法人京都市まいるプロジェクト
 - 一般社団法人 new-look
 - ほっとコミュニティ
 - NPO 法人リーダーズカフェ
 - 子どもの友
 - 関関 COLORS
 - 聖和キャンパス学生 YMCA
 - 適応教室 Pal たからづか
 - Eco-Habitat 関西学院
 - どんぐり文庫
 - SSV 関西学院
 - 西宮地区 BBS 会
 - CLUB GEORDIE
 - 西宮まちづくり連携プロジェクト
 - J-FUN ユース K.G.
 - PENS
 - 学内団体 (8 団体)
 - ivusa 兵庫西宮クラブ
 - ボランティア・フレンド・メディア
 - 学生国際協力団体 CUE
 - 神戸 (VFM 神戸)
 - 日本手話サークルはなまる

START UP KSC ! はじめようボランティア! ~ボランティア説明会&なんでも相談コーナー~



日 程： 2021年4月7日 (水) ①10:30 ~ 11:30 ②15:00 ~ 16:00
場 所： 神戸三田キャンパス ①アカデミックコモンズシアター
 ②VI号館202教室

参加者数： 学生約140人 (①40人、②100人)

内 容： ボランティアQ&A
 ヒューマン・サービス支援室の紹介
 活動の注意点
 サイコロトークでボランティアと学生生活紹介

- 目 的：**
- ① 新入生にボランティアの魅力や、多様な活動があることを知ってもらう
 - ② 新入生に学生COの雰囲気や活動の楽しさを伝える
 - ③ 新入生が「ボランティアは自分にもできることなんだ!」と気付く

ボランティア EXPO

日 程：①2021年4月14日（水）～16日（金）10：30～16：50
②2021年4月20日（火）～22日（木）10：30～16：30
③2021年4月26日（月）～28日（水）10：30～16：30
④2021年4月10日（土）、11日（日）、18日（日）
10：00～11：30、13：00～14：30、16：00～17：30

場 所：①西宮上ヶ原キャンパス 吉岡記念館1階ラウンジ・研修室1～4
②神戸三田キャンパス II号館210教室
③西宮聖和キャンパス ラーニングコモンズリプラ2階
④Zoomによるオンライン開催

参加者数（延べ）：上ヶ原255人、三 田38人、聖 和37人、オンライン61人

内 容：毎年開催している関学生が所属するボランティア団体の合同説明会。今年のコンセプトは「コンビニ」。

対面とオンラインで実施し、来場した学生は、自分の興味のある団体のブースを回り、先輩から直接活動内容などの話を聞くことができる。

目 的：ボランティアに興味がある学生や大学に入学し何かを始めてみたいと思っている学生に対してボランティア団体への所属という選択肢を提示する。何気なく足を運んでもらうことで、学生にボランティアに興味を持ってもらう、またボランティアを身近な存在としてとらえてもらう。

オンラインでも実施することで、対面のボランティア EXPOに参加できない学生も、家から気軽に参加できるようにする。

出展団体：学生 CO、その他 22 団体

○大学登録団体（8 団体）

K.G.BrainHumanity

関西学院上ヶ原ハビタット

ほっとコミュニティ

学習ボランティアサークル ALIVE

乳幼児のあそび研究サークル子どもの友

CLUB GEORDIE

Eco-Habitat 関西学院

J-FUN ユース K.G.

○学内団体（7 団体）

ivusa 兵庫西宮クラブ

学生国際協力団体 CUE

日本手話サークルはなまる

HeForShe 関西学院大学

COR s

関西学院大学 YMCA 神戸三田キャンパス

Bridge for Children, KGU

○学外団体（7 団体）

関関 COLORS

西宮地区 BBS 会

PENS

西宮まちづくり連携プロジェクト

適応教室 Pal たからづか

一般社団法人 new-look

一般社団法人京都すまいるプロジェクト



動画制作「今ってどうなん!? ボランティア!」学生COがインタビュー!



掲載：学生CO YouTube チャンネル

様式：動画2本

協力団体：VFM 神戸、ゆりのき生活サポート倶楽部

内容：コロナ禍でボランティア団体がどのような活動をしているのか、また工夫されているのかなど下記3点について学生COがインタビューし、動画として公開する。

- ・普段の活動内容
- ・コロナ禍における活動の変化
- ・コロナ禍での活動の工夫

目的：対面活動が難しい中で、学生がボランティア情報に触れる機会が少なくなってしまったため、外部のボランティア団体はどのような活動を行っているのかなど動画にまとめ、コロナ禍でのボランティアの現状を発信する。

防災食ぐらんぷり（三田CO企画）



日程：① 防災食セット考案会
2021年8月25日（水）13:00～15:00

② パネル展示&アンケート

2022年1月6日（木）～20日（木）

③ 結果発表（動画公開）2022年2月28日（月）

場所：① Zoomによるオンライン開催

② 神戸三田キャンパス アカデミックコモンズ
インフォメーションホール

③ 学生COのYouTubeチャンネルにて公開

内容：自分が災害の時に使用したい防災食のセットをチームごとで作る。実際にその防災食を購入し、セットの実物を揃える。パネル展示を通じて、どのセットが良いかアンケートをとる。また、支援室長・副室長や、神戸三田キャンパス事務室職員へインタビューを行い、防災食の効果やキャンパス内の防災についてなどを学び、結果発表時に伝える。

目的：学生と防災を繋げることで防災食を身近に感じてもらい、一人暮らしの大学生の家にも防災食を設置してもらおう。また災害に対して自ら楽しく気軽に備えてもらおう。防災に対するハードルを下げること、災害ボランティアへのハードルも下げる。

関学ボラマップ（3年生CO企画）



- 掲載:** 支援室来室者への配布
SNS 等での発信
- 様式:** Google マイマップの機能を活用し、ボランティア先の情報にピン付けしたオンラインマップの作成
PDF データを作成し、パンフレット型で持ち歩きが出来る地図を印刷して支援室前のラック等で配布
- 内容:** キャンパス周辺のボランティア先をオンライン上の地図と印刷された地図にまとめる。オンライン上の地図では、現在支援室で紹介できるボランティアを色で識別して表示。紹介できる情報が変更され次第、継続的に更新。印刷版についても定期的に更新する。
- 目的:** ボランティア情報を地図上に載せることによって可視化し、誰でも情報を得ることができるようにする。誰でも気軽に閲覧できる、また手にとることができる地図を作成することで、身近にあるボランティアの存在に気付き、実際に参加してもらうきっかけにする。

コロナ禍で今私たちにできること～関学生の家にいる本で全国に医療物資を届けたい～（2年生CO企画）



- 日程:** 西宮上ヶ原 2021年11月15日(月)～19日(金) 10:30～16:20
西宮聖和・神戸三田 2021年11月16日(火)～18日(木) 10:30～16:20
- 場所:** 西宮上ヶ原 吉岡記念館 1階ラウンジ
神戸三田 II号館210教室
西宮聖和 ラーニングコモンズリプラ
- 参加者数:** 54人 (提供冊数405冊)
- 寄付先/寄付冊数、金額:**
- ① 日本財団 (株式会社/バリューブックス「チャリボン」サービス利用) / 254冊、¥17,618
 - ② Yahoo!基金「新型コロナウイルス 医療崩壊を防ぐための支援」(古本買取通販ドットコム株式会社「もったいない本舗」サービス利用) / 70冊、¥633
 - ③ 西宮市地域共生館ふれぼの / 81冊、本を寄贈
- 内容:** 学内でブースを設けて学生・教職員から本を回収し、本を寄付金に変えるサービスを利用して新型コロナウイルス感染症に関わる支援団体・基金へ寄付を行う。また、児童・生徒の利用者がいる西宮市地域協生館ふれぼのへ本をそのまま寄贈する。
- 目的:** 自身が使い終わったものを寄付するという小さなことから、誰かのためにできることがあることを発信し、感じてもらう。新型コロナウイルス感染症の影響で大変な思いをしている人々を支援する。

ボランティア week

日 程：2021年12月6日（月）～12月10日（金）

場 所：西宮上ヶ原、西宮聖和、神戸三田 各キャンパス、Zoom によるオンライン開催

参加人数：①8人 ③11人 ⑤348人（上ヶ原：236人、三田：53人、聖和：59人）

内 容：ボランティアを知るきっかけを作ったり、ボランティアとはいったい何か？ということを探るために毎年開催しているイベント。「え、身近やん！キミは知ってる？～こんなことでもボランティア～」というコンセプトのもと、下記7つの企画を実施。

1. 支援室企画

- ① オープニングイベント ボランティアについて楽しく知ろう！
専従 CO と学生 CO からボランティアの基礎情報、体験談紹介
- ② ボランティア関連図書の展示 あなたの知らないボランティアの世界
上ヶ原図書館にボランティア関連図書の特設コーナーを設置
- ③ トークセッション 身近な同世代とつながるボランティア～自身と仲間の孤立を防ごう～
身近な同世代（10～20代）の現状＝コロナ禍での孤立・困窮の具体的な状況について知る・共感することで、ボランティア参加へつなげる
- ④ ボラメッセージ博覧会 私にとってボランティアは〇〇私にとってボランティアは「〇〇」の部分を書き、写真撮影して提出されたものを理由とあわせて SNS 投稿 & 写真を模造紙に貼り学内で展示

2. 学生 CO 企画

- ⑤ クイズ&アンケート
ボランティアの多様性を知ってもらえるようなクイズを出題し、ボランティアへの敷居を下げる
またアンケートを通して、相手の経験などを聞き、ボランティアの身近さに気づいてもらう
- ⑥ 動画制作 「サクッとボランティアに触れてみよう！」
ボランティア団体へのインタビューやボランティアジャンルについてまとめた動画を作成し YouTube チャンネルにて公開
- ⑦ クロージングイベント ラジオ生放送「ボランティアってどんなイメージ 団体の方や学生の皆さんの声を聞いてみよう！」
ボランティアに対するイメージ・ボランティアに参加した際のキッカケや印象に残ったエピソードを募集し、YouTube チャンネルにて生放送

目 的：ボランティアが身近ではない人に対して、身近に感じてもらうきっかけを作ることを目的とし、ボランティアに対する敷居を下げてもらう。ボランティアを学生生活の選択肢の一つとして考えてもらえるようにする。



学生CO総会

日 程：2021年12月18日（土）

場 所：Zoomによるオンライン開催

参加者数：学生CO 45人/職員 2人

内 容：代替わりを兼ねた1年間の総括する会。また総会に向けて1年間の活動の総まとめとなる資料「2021年度学生CO活動報告書」（A4判104ページ）も作成した。

- ・アイスブレイク
- ・個人目標振り返り「十人十色」
- ・次期体制報告、年間目標決め
- ・企画目標振り返り「ツリーを飾ろう」
- ・部署目標振り返り「表彰状を作っちゃおう」

目 的：学生CO全体で1年間の成果や課題を確認し、来年度の活動について考える。



個人目標は十人十色...?

自分が立てた目標の振り返りシートに直感で色を塗ってもらいます！
一年かけて振り返ってきた、個人目標シート。
「その月にどうして、〇〇と書き込んだのか」「自分の思う達成度はどうなのか」など
今、あなたが思う率直な気持ちを色で示してください。

表彰状
縁の上下の力持ちで賞 代表部 殿

あなたは2021年度の部署活動において
mtgのパワポを毎週工夫を凝らしてくれた
mtgの予定を毎週しっかり考えてたててくれた
全企画のLINEに入り、動きを手伝ってくれた
COの全体を気にかけて、個別のCOへの丁寧な声かけもしてくれた
実行委員の心の支えとなった
いつでも手助けをするという安心感をメンバーに与えてくれた
キャンパスを超えて連携をとってくれた
メンバーの目の届いていないところも指摘してくれた
視野が広く手厚いサポートしてくれた

よって縁の下も上も大いに支えているとし、これを表彰します。
2021年12月18日

9班
(ボランティアweek)

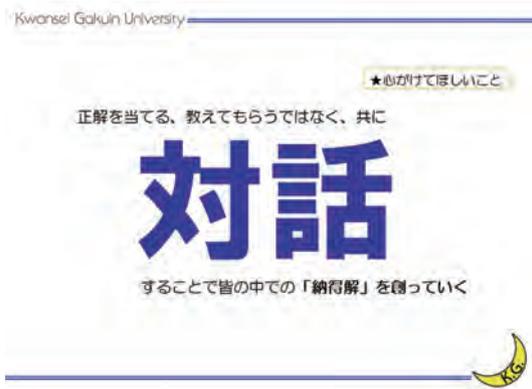


3. 研修

ヒューマン・サービス支援室では、活動の中核にある学生COがコーディネーターとして十分なスキルを発揮するために、研修を行っています。2021年度は6月に基礎研修、2022年3月にコーディネーション研修をオンラインで行いました。

基礎研修

- 日 程**：2021年6月12日（土）10：00～15：00
 ※やむを得ず欠席の場合、面談と動画を用いて、研修内容をレクチャー。
- 場 所**：①オンデマンドによる動画受講/②Zoomによるオンライン開催
- 参加者数**：59人（うち、新メンバー22人）
- 内 容**：①講義形式の動画2本を配信。Zoom研修の日までに受講することを必須とした。次の通り、基礎的な内容を理解するための構成とした。
- ・ボランティアとは？ボランティアコーディネーターとは？【10分11秒】
 ボランティアの要素、語源、する理由、魅力
 コーディネートの意味、対等につなぐための関心、コーディネーターの8つの役割
 - ・ヒューマン・サービス支援室と学生コーディネーターの歴史と役割【14分8秒】
 大学ボラセンの存在意義、ヒューマンサービスセンター（HSC）の成り立ちと活動
 ヒューマン・サービス支援室の成り立ちと活動・役割、組織体制
 学生COの役割、意識すべきポイント（一体感、自主性、協働）
- ②新メンバー、現役メンバーがオンライン上で集い、次の通り、学生CO同士が互いのことを知り協働を実現するための内容で構成した。
- ・アイスブレイク
 自分の趣味&性格を入れた自己紹介、質問してみよう！
 ゆるキャラ総選挙！！
 - ・ボランティア、学生COの活動で大切にしてほしいこと
 対話について（聴く×話す）
 - ・ボランティアコーディネーション
 多様な価値観を知ろう、みんなの至福の時間は？、無人島に1つだけ持っていくな？
 なりきり！旅行コーディネーター
 なりきり！百貨店イベント企画
- 目 的**：新たに入会した学生COを主たる対象とした新人研修。ボランティアコーディネーターの重要性と基本的な知識及び支援室との関係など基本的な事柄を理解する。また、他者との協働のために必要なこと、自分ができることが何かを主体的に考え、多様性を理解し相手を尊重したうえで対話ができるようになることを主眼に置いた。



コーディネーション研修

日 程：2022年3月31日（木）13：00～15：30

場 所：Zoomによるオンライン開催

参加者数：32人

- 内 容：
- ・プチブレイク「最近嬉しかったこと」「Youは何しにCOへ？（COになったきっかけ、理由）」
 - ・コーディネーションについて講義
 - ・ロールプレイ
 - 「春ボラ」を用いたボランティア紹介
 - ・感想シェア
 - うまくできたこと、自身の強み
 - ボラ紹介のために、私はこれをやる！（私の行動宣言！）
 - ・ミーティングについて考えてみよう（学生CO 2021年度代表部より）
 - そもそもミーティングがなぜあるのか
 - ミーティングの参加者を増やすにはどういった工夫が必要か

- 目 的：
- ①コーディネーション（ボランティア紹介）で大切なポイントを知る
 - ②活動に自ら積極的に参加して楽しむための準備をする
 - ③イベントやミーティングを自分事にする

コーディネーションの手段は様々

- ・学生と地域の団体（ボランティア先で出会う方）を **対等な関係でつなぐ**
- ・「あと一歩」を一緒に踏み出す

基本の流れ

導入

- ・自己紹介
- ・交遊室の紹介
- ・ウェルカムシートの配入

会話をしながら、

- ★相手のことを知る
- ★一緒にボランティアを見つけしていく

まとめ

- ・応酬方法の確認
- ・ボランティア保険の説明
- ・アフターフォロー

紹介「してあげる」ではなく、対等に、一緒に見つける（寄り添う）姿勢で。

配布資料（コーディネーション基本の流れ）

Breakout 1 15分

「そもそもミーティングがなんであるのか」「なんで定期的にするのか」などミーティングの意義を考えてみよう

自分の意見をふせんにどんどん書いていこう（総会でやったやつ）

自分の意見（ふせん）を班員に共有しよう

※時間いっぱい考えてみて、意見前と出したし雑談しよかの流れじゃなくて、考えることを大切にしたい。

プチまとめ

意識もポイント

- ・情報共有の場（いろんな人の頑張りも見えてくる、全体の動きが分かる）
- ・意思決定の場（代表部が決めるのではない。みんなが決める）
- ・交流の場（ブレイクで話しが盛り上がることもよくある、MTで名前と顔覚え）
- ・アイデアを出す場（いろんな人の意見聞けておもしろい）
- ・意識を高めあえる場（OOちゃん頑張ってるから私も頑張ろうって刺激もらうことも）
- ・定期開催で大事なことを忘れにくいし、モチベ維持できる（たまにMTよりかはね？）
- ・自然とリアクション能力が身に付く（罰と親活で強い）
- ・ファシリや発表、書記など役割分担ができるようになる（自分の得意が見つかる） など！

知ってる？

実は、裏で代表部頑張ってるんで。

4. 来年度に向けて

2022年度学生コーディネーター 西宮上ヶ原・西宮聖和代表

法学部2年 中岩 瞳



2022年度学生コーディネーターの上ヶ原・聖和キャンパス共通代表を務めさせていただきます、法学部2年の中岩瞳です。

2022年度は新メンバー33名が加入して総勢71名となり、2021年度を上回る非常に大きな団体となります。2021年度は、新型コロナウイルスの影響を受けて活動が制限された状況でしたが、2022年度は、よりメンバーと教職員が一体となって「ボランティア活動の普及・活性化」に向けて取り組んでいると感じています。

2022年度は「Cheerful One Step!」という年間目標を設定しました。メンバー同士の交流関係を築きつつ、それぞれが積極的に活動に参加していき、大学全体に対して影響を与えることが出来るよう活動をしていきます。また、一人ひとりの個人目標や各部署ごとに目標の設定や定期的な振り返りをして、それぞれが年間目標を達成できるように努めてまいります。

私達は「ボランティアをしたい学生」と「ボランティアをしてほしい団体」の双方の思いをつなぐサポートをする存在であることに自覚を持ち、私達だからこそできることに挑戦し続け、関西学院大学のボランティアの活性化に貢献してまいります。

2022年度学生コーディネーター 神戸三田共同代表

総合政策学部1年 菊池 美輝

建築学部1年 前田 蒼太郎



2022年度新しく神戸三田キャンパス学生コーディネーター共同代表を務めさせていただきます、総合政策学部1年の菊池美輝と建築学部1年の前田蒼太郎です。2022年度は対面授業も増え、学生COも対面で活動できる機会が増えてきました。もちろん十分に感染対策には気を配る必要がありますが、それでも昨年と比べると活動の幅が広がり、ボランティア活動も学生COとしての活動も活性化し始めていると肌で感じています。この高まりを維持し続けるためにメンバー同士の交流を深め、外部に向けた企画の質を高められるよう動いていきたいと思っております。また、メンバーそれぞれが積極的にボランティアを楽しむことにより、今までよりも良いコーディネートができるよう取り組んで参ります。

三田COでは新しくバディ制度を取り入れ、新メンバーと既存メンバーで5人1組のバディを作り、新メンバーがすぐに学生COに馴染むことができるようにするとともに、それぞれのバディで企画などを行っていきます。そして、それぞれが主体となる場を作ることでより実感を持って活動に取り組むことができると考えています。

私たちはまず三田COがそれぞれの活動を楽しめるようにサポートし、そして、三田CO全員で神戸三田キャンパスの学生がボランティア活動を楽しめるようにサポートしていきます。また、三田COの活気を上ヶ原にも伝え学生CO全員で関西学院大学のボランティア活動を活性化できるようにサポートしていきます。

まだまだ未熟者ではございますが、より関西学院大学でのボランティア活動の活性化に貢献してまいりますので、どうぞよろしくお願い致します。

災害支援フォーラム

熊本地震現地ボランティア 活動概略、活動参加者数

2016年度	
4月14日（木）、16日（土）	平成28年 熊本地震発生
4月15日（金）～	学生COを中心に支援について検討のため打合せ
	LINEグループの作成
4月30日（土）～5月2日（月）	熊本現地視察
5月16日（月）～6月17日（金）	学内での募金活動（計17回）
5月20日（金）	熊本地震現地報告会
7月1日（金）～4日（月）	第1回熊本地震現地ボランティア
8月3日（水）～7日（日）	第2回熊本地震現地ボランティア
10月18日（火）～20日（木）	生協祭出店「くまモン・うまいもんフェア」 *学生有志によるチャリティー企画
10月28日（金）	熊本地震現地ボランティア報告会「とりま聞こか、そして行こか!!」
11月11日（金）～14日（月）	第3回熊本地震現地ボランティア
12月13日（火）、15日（木）	熊本地震現地ボランティア報告会「熊本地震はまだ終わっていない」
2017年2月24日（金）～28日（火）	第4回熊本地震現地ボランティア
2017年度	
4月10日（月）～28日（金）	熊本地震から1年 活動報告イベント パネル展示、ボランティアEXPO ブース出展、報告会、座談会
4月15日（土）～16日（日）	熊本現地視察
5月17日（水）	くまモンへの活動報告
6月2日（金）～5日（月）	第5回熊本地震現地ボランティア
9月7日（木）～11日（月）	第6回熊本地震現地ボランティア
11月17日（金）	リサーチ・フェア出展 「熊本のいま」を伝えたい
11月17日（金）～20日（月）	第7回熊本地震現地ボランティア
12月22日（金）	キオクのキロク展 活動報告展示会
2018年2月23日（金）～27日（火）	第8回熊本地震現地ボランティア
2018年度	
4月14日（土）～15日（日）	熊本現地視察
5月16日（水）	くまモンへの活動報告
6月8日（金）～11日（月）	第9回熊本地震現地ボランティア
9月1日（日）	「LookBack熊本 2 years ago」 放送（さくらFM）
9月6日（木）～10日（月）	第10回熊本地震現地ボランティア
10月13日（土）	熊本地震現地ボランティア参加者の集い（パート1）
10月16日（火）～18日（木）	生協祭出店「レモネード大作戦」 *学生有志によるチャリティー企画
11月9日（金）～12日（月）	第11回熊本地震現地ボランティア
12月10日（月）～14日（金）	パネル展示「なぜ今熊本に行くのか」
2019年2月22日（金）～26日（火）	第12回熊本地震現地ボランティア

2019年度	
4月13日（土）～14日（日）	熊本現地視察
4月14日（日）	「熊本のみんなは元気だモン！～熊本地震発生から3年を迎えて～」 放送（さくらFM）
5月22日（水）	くまモンへの活動報告
6月7日（金）～10日（月）	第13回熊本地震現地ボランティア
6月30日（日）	熊本地震現地ボランティア参加者の集い（パート2）
8月29日（木）～9月2日（月）	第14回熊本地震現地ボランティア
9月1日（日）	「いきなり熊本ラジオ！～現状とこれまでの振り返り～」 放送（さくらFM）
10月15日（火）～17日（木）	生協祭出店「うまいモン甘酒」 ＊学生有志によるチャリティー企画
11月15日（金）～18日（月）	第15回熊本地震現地ボランティア
2020年1月17日（金）	「kumamo to heart 未来へ繋ぐ支援」 放送（さくらFM）
2月28日（金）	第16回熊本地震現地ボランティア⇒現地の方々へのプレゼント作成 （現地活動は新型コロナウイルス感染症の影響で中止）
3月31日（火）	「私たちと4年の歩み ～熊本地震現地ボランティアを通じて考えたこと～」 冊子発行
2020年度	
7月7日（火）～2021年3月30日（火）	熊本地震現地ボランティア体験記～災害支援ボランティアの可能性～ HPに参加者のインタビュー記事を随時公開
10月10日（土）	熊本地震現地ボランティア参加者 Zoom同窓会
2021年度	
10月9日（土）	災害支援フォーラム 「継続的な活動が生み出した学生と被災者の新たな支援の形 ～『熊本地震現地ボランティア』4年間の活動を振り返って～」

現地ボランティア参加者数

応募人数 (延べ)	583
(実数)	447
参加人数 (延べ)	318
(実数)	247

※毎回全学から参加者を募集し、現地の受け入れ状況や活動内容を考慮したうえで、実際の参加については抽選で20名前後に調整していました。

回	学生(大学院生含む)	教職員(引率)
第1回	20	3
第2回	18	3
第3回	38	3
第4回	23	2
第5回	19	3
第6回	22	3
第7回	18	3
第8回	20	2
第9回	21	4
第10回	18	4
第11回	16	3
第12回	21	2
第13回	16	3
第14回	16	4
第15回	16	3
第16回	16	4
合計	318	49

参加回数	人数
7回	2
6回	0
5回	2
4回	2
3回	7
2回	31
1回	203
0回	200

学部学年別参加者数 (参加時点での所属)

(人)

学年	神	文	社	法	経済	商	理工	総合政策	人間福祉	教育	国際	研究科	合計
1年生	1	11	13	17	10	8	5	25	5	2	4		101
2年生	0	8	13	13	7	11	4	24	9	2	1		92
3年生	0	10	11	6	3	10	1	7	5	4	6		63
4年生	0	3	11	15	5	5	3	6	3	0	2		53
研究科												9	9
合計	1	32	48	51	25	34	13	62	22	8	13	9	318

開催趣旨・プログラム

継続的な活動が生み出した 学生と被災者の新たな支援の形

～『熊本地震現地ボランティア』4年間の活動を振り返って～

日時：2021年10月9日（土）13：30～16：15

場所：Zoomによるオンライン開催

参加者数：約80人（大学生、卒業生、教職員、熊本県・益城町在住関係者、一般、メディア、災害支援団体等）

関西学院大学では、2016年度～2019年度の4年間、熊本地震現地ボランティア活動に取り組んできました。計16回の活動に参加した学生数の合計は延べ318名。多くの学生と取り組んできた現地ボランティアでは、学生と被災者による新たな支援の形が生まれました。このフォーラムでは、活動を振り返りながら、継続的な関わりだからこそできること、大学や学生が関わるからこそできること、そしてこれからの災害支援について皆さんと共に考えました。

【イベントプログラム】

13：30 開会挨拶

富田 宏治（副学長 / ボランティア活動支援センター長）

13：40 第1部

現地ボランティア活動参加学生による活動報告「私たちと益城町の4年間」

14：10 第2部

パネルディスカッション「継続的な活動が生み出した学生と被災者の新たな支援の形」

15：10 第3部

参加者同士の意見交換会「私たちが紡ぐ未来～学生ボランティアができること～」

15：35 第4部

室崎益輝氏による今後の展望・まとめ「学生ボランティアが被災地に関わる意味」

16：05 閉会挨拶

関 嘉寛（ヒューマン・サービス支援室長）

16：15 閉会

【総合司会】

植田 隆誠（総合政策学部3年生 / 学生コーディネーター）

【災害支援フォーラム実行委員会】

今村 康佑（国際学部4年生）

山口 真奈（法学部4年生）

津崎 麻織（法学部3年生 / 学生コーディネーター）

神保 千琴（法学部3年生 / 学生コーディネーター）

植田 隆誠（総合政策学部3年生 / 学生コーディネーター）

岡 秀和（ヒューマン・サービス支援室ボランティアコーディネーター）

第1部 現地ボランティア活動参加学生による活動報告「私たちと益城町の4年間」

熊本地震現地ボランティアに参加した学生（災害支援フォーラム学生実行委員）と卒業生から活動報告を行いました。熊本地震の概要、現地ボランティアのはじまり、具体的な活動内容、伝えたいことなどを写真や資料を用いて発表しました。最後に伝えたいこととして、学生だからこそ「やりたいことを実現できる時間と環境」があるので活動に継続して参加することができ、活動する中では「地域と世代を超えたつながり」をつくることのできる、ということをお話しました。

登壇者

氏名	学部/研究科	学年/卒業年度	活動参加回	
今村 康佑	国際学部	4年生	第12回	フォーラム 実行委員
津崎 麻織	法学部	3年生	第13回	
神保 千琴	法学部	3年生	第13回、15回	
山口 真奈	法学部	4年生	第14回	
植田 隆誠	総合政策学部	3年生	第15回、16回	
窪田 風子	人間福祉学部	2019年卒業	第4回、8回	卒業生
菅 夏海	社会学部	2020年卒業	第6回、10回、11回、15回	
森 美月	人間福祉研究科	2021年修了	第2回、3回、5回、7回、9回、12回、16回	

第2部 パネルディスカッション「継続的な活動が生み出した学生と被災者の新たな支援の形」

大学と学生による継続的な活動の意義について、パネルディスカッションでそれぞれの視点からご意見を伺いました。宮崎さん・佐藤さんからは学生たちが来ることを住民の皆さんが楽しみにしていたこと、人とのつながりの絆ができたことを感じ取ってくれたら嬉しいということなど、益城町の皆さんが学生たちにどのような思いで接していたかを伺うことができました。また、関室長や堀之内さんからは、大学として「何かしたい」という学生の後押しをすることで、学生たちの人生が変わるほどの大きなきっかけができること、支援する人—される人という一方的な関係ではなく、個人—個人の双方向の関係性がうまれ、そのような人との出会いを通じて大学と被災地が共に学生を育てることなど、大学として活動を継続することや学生が支援に関わることの意義が対話の中から見えてきました。

モデレーター

室崎 益輝 さん 兵庫県立大学大学院 減災復興政策研究科 科長・教授

登壇者

佐藤 忍さん 熊本 YMCA 職員（元・木山地域支えあいセンター、現・益城町総合体育館担当）職員

宮崎 律子さん 益城町住民 元・馬水東道仮設団地集会所館長

堀之内 有希さん 2016～2019年度 ヒューマン・サービス支援室ボランティアコーディネーター

関 嘉寛 ヒューマン・サービス支援室長、社会学部教授

第1部登壇者（学生実行委員、卒業生）

第3部 参加者同士の意見交換会「私たちが紡ぐ未来～学生ボランティアができること～」

Zoomのブレイクアウトルームの機能を用いて、フォーラム参加者の皆さんと一緒に「学生ボランティアだからこそできる災害支援活動」「これから、自身や周囲の方と取り組みたいこと」についての意見交換会を行いました。

【学生ボランティアだからこそできる災害支援活動として出た意見（一部抜粋）】

- ・大人でも子供でもない間なので、どの世代にも受け入れてもらいやすく、多世代と交流できる
- ・名刺や肩書がないので、個人対個人のフラットな関係性で話すことができる
- ・フットワークが軽く、時間の調整がしやすいので「とりあえず現地へ行く」ことができる
- ・身近な場所で災害が起こった時に自分事にでき、大学周辺を支えられる
- ・大学の施設等を利用することで学生同士が集まりやすく、準備や打合せ、振り返りがしやすい

第4部 室崎益輝氏による今後の展望・まとめ「学生ボランティアが被災地に関わる意味」

室崎先生に全体のまとめとして「学生ボランティアが被災地に関わる意味」についてご講演いただきました。重要なポイントとして5つのキーワードをもとにお話していただきました。

- ① 共感と信頼
- ② 現場で学んだことを 大学に・社会に・人生に活かす
- ③ 下ごしらえと振り返り（ボランティアサイクル）
- ④ 支援の多様性と自発性
- ⑤ 人のつながりとチームプレー

講演

室崎 益輝 さん 兵庫県立大学大学院 減災復興政策研究科 科長・教授



第1部 現地ボランティア活動参加学生による活動報告「私たちと益城町の4年間」

■植田 第1部では、まず概要を説明して、次にどのようにこの現地ボランティアが始まっていったのか、そしてその後どのように活動をしたのか、活動内容などを皆様にお伝えします。最後にまとめとして、私たちが伝えたいことを話していきます。

前例がない巨大な地震、被害の大きさ

■今村 国際学部4年の今村康佑と申します。私が現地ボランティアに参加した一番の思い出は、現地の子供たちと遊んだことです。

まずは私から、熊本地震の概要についてお話させていただきます。

熊本地震の発生時刻は、2016年4月14日。21時26分にマグニチュード6.5、震度7の大きな地震が起きました。熊本地震の大きな特徴の1つとして、これほど大きな、震度7の規模の地震が2回起こってしまったことが上げられると思っております。実際に、わずか28時間後の4月16日の夜中の1時25分に、さらに大きなマグニチュード7.3の本震が起きました。歴史上で、阪神・淡路大震災以降で起こった震度7の地震は、新潟県の中越地震と2011年の東日本大震災、次いでこちらの熊本地震になります。先ほどもお伝えしたように、震度7の地震が2度起こったことは、これまでにない異例のことで、非常に大きな被害が起きたことが分かります。さらにもう一つの特徴として、4,000回を超える、これも今までにはない非常に多くの余震が起こったことが上げられます。

続きまして、地震による被害についてお話します。内閣府が発表している防災情報「2016年（平成28年）熊本地震」P3に記載されている内容を見ると、熊本地震における九州5県（福岡・佐賀・熊本・大分・宮崎）の人的被害の中で、死者・負傷者数が圧倒的に多いのが熊本県になります。5県合計の死者数211名のうち208名、重症者数

1,142名のうち1,123名、軽傷者数1,604名のうち1,552名が熊本県で起きた被害です。

また、同じく内閣府の発表による熊本地震における周辺県の建物被害の概要を見ると、5県合計の全壊家屋数8,682棟のうち8,673棟、半壊家屋数33,600棟のうち33,432棟、一部損壊家屋数152,749棟のうち144,402棟が熊本県で起きた被害です。このように、人的被害、建物被害のいずれも大きな被害が起きたことが数字からも分かります。

続きまして、私たちが現地に訪れた益城町について、少し触れさせていただきます。先ほど、九州の中でも熊本県が非常に大きな被害を受けたとお話したのですが、その中でも、私たちが訪れた益城町は41人の死者数を出したことが熊本県のホームページに記載されております。ちなみに、益城町は熊本県熊本市に次いで二番目に多い死者数が出たのですが、熊本市は人口で益城町の20倍以上を誇る大きな町ですので、二番目に死者数が多かったということは、非常に大きな被害だったことが分かると思います。

最後に、仮設住宅等入居戸数等の推移をみると、震災が起こった2016年度以降、2017年から2020年にかけて、仮設住宅に入居する方々の数は大きく減少傾向にあります。熊本市が2021年3月に発表した『熊本の今～復興に向けた取り組みの状況～「震災復興計画の総括」データブック版』P10



によると、2017年5月には11,052戸あった仮設住宅等入居戸数が、2020年5月には41戸にまで減少しています。

私自身は2018年2月に仮設住宅に訪問させていただいたんですが、先ほど自己紹介でお話したように、小学生ぐらいの子供たちと遊ぶことが多くありまして、現地に訪れる前は、仮設住宅で生活することに少しネガティブな感情を持っていたんですが、実際に関わってみることで、私たちの子供時代と何ら変わりのない、無邪気に遊んでいる姿を目の当たりにして、仮設住宅の生活というイメージが、ちょっとポジティブなものになったというか、そういった経験ができたことが、僕にとっては嬉しかったです。

学生たち自身の思いが原点 募金活動・現地ボランティア活動へ

■山口 法学部4年の山口真奈と申します。熊本ボランティアで印象に残っていることは、益城町での活動はもちろんのこと、熊本への行き帰りに船の上でミーティングや寝泊まりをしたことです。

続いては、地震発生直後の関学の活動についてお伝えしたいと思います。熊本地震の発生から現地でのボランティア活動に至るまでの経緯、活動の内容について卒業生の窪田さんにお話していただきたいと思います。窪田さん、よろしくお願

します。

■窪田 2019年に人間福祉学部を卒業しました、窪田風子と申します。今は福祉関係の仕事をしております。当時を振り返りながら、今日はお話できたらなと思っています。

私からは、地震が発生した後どんなふうに関地の活動になっていったのかということ、当時携わっていたところがあるので、お話をさせてもらえればと思っています。

まず、私が所属していたヒューマン・サービス支援室学生コーディネーターの先輩で、すごく精力的に活動されていた、リーダーになってくださった方がいらっちゃって、私もその方に巻き込まれた感じで、熊本地震が発生した日の夜に、熊本のために学生として何かできないかということ、まず、LINEのグループが立ち上がりました。Twitter等のSNSや友達同士のネットワークを活かし、口コミで広めるなどのおののできることをしていった中で、結果として、被災された方のために何かしたいという気持ちを持った100人以上の学生のメンバーが集まりました。

メンバーは集まったものの、これからどう活動していくのか、情報も錯綜している中で、何ができるのか手探りの中で、当時ボランティアコーディネーターされていた堀之内有希さんがいつも相談に乗ってくれました。ネットワークとして何をしようか、何ができるんだろうかということで、まずグループの中でアンケートを取りまし



た。その結果、募金活動や、現地で支援活動したいと思ってる人が多いことが分かったので、ひとまず集まって、どんな気持ちを持って何をしたいと思ってるのか、顔を見て話し合おうということでミーティングをすることになりました。

学生たちと堀之内さんでミーティングを重ねる中で、私たちの「現地に行きたい」とか、「募金活動したい」という思いを酌み取っていただき、結果として、通常は許可されていなかった学生による大学構内での募金活動を、ヒューマン・サービス支援室と関西学院宗教活動委員会の管理・御協力をいただくことで特別に行うというところにつながっていきました。

休み時間などに募金活動を続けていく中で、もちろんお金など間接支援もすごく大切だけれども、現地に行って、直接何かをしたいという気持ちが強くなっていった側面もありました。その結果として、大学として現地活動の予算を確保していただき、ヒューマン・サービス支援室による現地ボランティア活動が開催をされたというのが、ざっくりとした流れになっています。

活動に際しては、現地で受け入れてくださった益城町の方々はもちろん、移動手段として名門大洋フェリーさん、宿泊先として阿蘇ホテルさんなど、たくさんの方に支えられたボランティア活動であったかと、振り返って感じているところです。活動中も、その方々と一緒に活動しているということが、すごく力になりました。



私はネットワークから少しずつ携わらせてもらって、すごく大きな何かが出来たわけではなかったんですが、現地に行きたいという気持ちは当初からずっと持っていて、発災から1年後ぐらいによろやく現地に行くことができました。

行ってみて感じたのは、ニュースなどで目にした状況だけではなくて、実際に自分の目で見て、暮らしている方々と話して触れ合ってみて、よろやく自分の立場に置き換えて想像したり考えることができたような気がしています。

熊本の皆さんとの関わりの中で、人と関わることは難しいなと思いましたが、活動中もたくさん悩みました。でも、逆にすごく面白いと思う部分もあって、私の人生の中でターニングポイントになった体験になっています。

ざっくりですが、そんな形で現地の活動につながっていったという話でした。

■山口 私もお話をお伺いして、当時学生だった先輩方の強い思いと、たくさんの方の御協力があったからこそ4年間続く活動になったことにとっても感激しました。また、各所の皆様の御尽力のおかげで、充実した活動を行うことができました。本当にありがとうございました。

肌で体感した避難所と仮設住宅の状況、活動の変遷

■神保 法学部3年の神保千琴です。私は活動の中で戸別訪問を行い、1対1で住民の方とお話したことが印象に残っています。私からは、現地ボランティアの活動について説明させていただきます。

現地での活動は、2016年7月に最も被害が大きいといわれている熊本県益城町の避難所、益城町総合体育館で始まりました。体育館の時期（第1回、2回現地ボランティア）は合計38名の学生が活動し、足湯やトイレの清掃などの活動を行いました。当時活動されていた卒業生の森さんにお話を伺いたと思います。森さん、当時の避難所はどのような状況でしたか。

■森 2021年に人間福祉研究科を修了しました、森美月と申します。継続して参加させていただく中で、現地で出会った方々が「おお、ようまた来たね」とか「お帰り」とか、自分の第二の故郷みたいになっていくのがすごく楽しくて、うれしくて、ずっと参加していました。

私が初めて現地へ行ったのは、2016年8月でした。当時は体育館の中で寝泊まりされている方も多かったので、寝室を少し外から覗かせていただいたときに、天井が地震の影響で剥がれ落ちている部分もあって、それを大きな白いシートとかで覆っているなど対策されていたのがすごく印象的で、その下で段ボールベッドを利用して寝泊まりされている方がいらっしゃいました。

また、体育館の外も、道路や駐車場に亀裂が入って、子供たちも自由に走り回れないような状況だったのがすごく印象的でした。

■神保 被災直後に行かれたことで、そういう状況を目の当たりにされたんですね。では、森さんが避難所での活動で印象に残っている出来事について教えてください。

■森 駐車場に亀裂が入って子供たちが遊びにくい状況だったんですが、仮設的にプレイパークを開いて、夏場だったので水遊びをしたら、子供たちは元気に走り回るわ、きゃっきゃ言うわで、すごい楽しくて。遊ぶための場所をこちらが作ってあげるというより、もう一緒になって楽しむというか、私たちも無邪気さを持つ子供に戻ったような感じで過ごしたことは、すごく印象的でした。

また、大人の方々に向けては足湯の活動も実施しましたが、足を温めたりすると、心も緩むんだなというのがすごく印象的で、足がつかっている時間が長いほどに心も緩んできて、会話の口調や話してくださる内容も変わって行って、優しい、ふんわりした緩い雰囲気雑談ができたので、足湯の力はすごいなと思いました。

実はボランティアに行く前に研修として足湯講座を受講したりもしたので、現地での活動だけでなくこのボランティアを通して様々な経験をさせていただけたのだなと思っています。



■神保 森さんに話していただいた避難所での活動の後、2016年11月からは益城町の仮設住宅で活動しました。仮設住宅では4年間で合計264名(第3回～15回現地ボランティア)の学生が活動し、戸別訪問や集会所での企画を通して住民の方々と交流しました。

私は自己紹介でもお話をさせていただいたように、戸別訪問で窓拭きのお手伝いをしました。そこで御高齢の夫婦のお宅を訪問したのですが、掃除を終えた後に、「足腰が悪くて集会所にもあまり行けないから、掃除するのも大変だし、やってくれて本当にありがとう。助かる。」とくださったのがすごく印象的でした。この訪問を通して、仮設住宅の中での孤立など、避難所の時期とはまた違った不安や問題を抱えて住民の方々が生活されているのだなと感じました。

続いて、各回の流れについてです。このボランティアでは、応募(参加者募集)、準備、現地活動、振り返り、事後活動といった流れで活動しました。まず準備では、同じ回に参加するメンバーと交流を深めるためにアイスブレイクを行ったり、熊本地震の概要や現地の状況について説明を受けながら学びを深めました。

その後、参加メンバーが4つのグループに分かれて、約2か月間かけて、仮設住宅で行うイベントの準備を行いました。例えば、私が行った戸別訪問では、掃除道具の数を調整したり、インターホンで住民さんに呼びかける練習を交代で行った

りました。

準備では、企画内容の考案やチラシ作り、住民の方との接し方などをグループのメンバーと協力しながら自分たちで考えて行ったので、学部や学年を越えたつながりができ、多くのことを吸収することができました。

活動、振り返り、 発信のボランティアサイクル

■津崎 法学部3年の津崎麻織です。このボランティアで印象に残っていることは、ボランティアの活動はもちろん、関西に帰った後に、ラジオに初めて出演することができたことです。

私からは、現地での活動についてお話します。現地では、2～3日間かけて、主に3つの仮設住宅へ行き、それぞれグループで準備してきたイベントを集会所で開催しました。

例えば、韓国からの留学生が参加したグループでは、住民の方と一緒に韓国料理を作る企画をしました。このように、このボランティアは全学生から毎回募集を募って開催されたものだったので、学部や学年、背景が違う学生たちが集まり実施できたことで、毎回、参加メンバーの個性を生かした企画を行うことができました。ちなみに、私が参加した回では七夕飾りを作ったり、住民の方と一緒にお茶を飲みながらお話をしたり、戸別訪問をしたりしました。七夕飾りをした理由は、私たちが6月にボランティアに参加したので、季

節に合ったイベントを行いたいと思って企画しました。他の回でも季節に合わせたイベントを開催できました。

企画を行う中で、仮設住宅の方々から震災の話やその当時の生活のお話をお聞きすることができ、現地に行くまでに想像していた住民の方々や仮設住宅の状況とは違ったお話を聞くことができ、自分の中でとても大きな経験になりました。

また、私はボランティアに対して、働いて手伝うというイメージを持っていたのですが、このボランティアに参加したことで、それだけではなく、お話を聞くことや一緒に遊んだりすることがボランティアになることに気づきました。

そして、私たちは1日の活動が終わるごとに振り返りを行って、その日のよかった点や反省点をみんなで話し合うことで、次の日の活動に生かすことを考えました。全ての活動が終わった後には全体の振り返りをして、事後活動や次の活動のために意見を出し合っ、次に生かせるようにしました。

このように私たちは現地で活動を行ってきましたが、関西に帰ってきた後も、熊本のことや、このボランティアについて、それぞれが感じたことを多くの人に発信することを大切にするため、事後活動を行いました。

例えば、西宮のラジオ番組（さくらFM）に出演したり、ボランティアについてまとめた冊子を作ったりしました。自己紹介でもこのボランティアをきっかけに初めてラジオに出演したという話



をしましたが、私は2019年9月の回に参加して、熊本のことを発信しました。慣れないラジオの収録はとても緊張したのですが、防災士でもあるMCの近藤栄さんが優しく話しかけてくださったことで、ボランティアで感じたことや体験したことを自分の言葉で発信することができたと思います。

思いや関心を形にした、 有志による生協祭でのチャリティー企画

■津崎 また、ボランティアに参加したメンバーの中には、有志で熊本や被災地を支援する活動を企画した人もいました。まず、2018年に行った『レモネード大作戦』では、当時、西日本豪雨水害で被災された地域である瀬戸内のレモンを使ったレモネードを作ったり、2019年に行った『うまいもん甘酒』では、熊本の芋を使用した甘酒を作ったりして、いずれも大学の「生協祭」というイベントで販売しました。いずれも、ベルマーク教育助成財団を通じて売上金を寄付しました。

その有志活動について、企画をされた菅さんにお話を伺いたいと思います。どのようなきっかけで活動を行おうと思われましたか。また、活動の感想もお願いします。

■菅 2020年に社会学部を卒業しました、菅夏海と申します。普段災害とは全く関係ない仕事をしていることもあって、ボランティアに触れる機

会も少なくなってしまうんですが、学生のときに活動していた内容でしたり、私が感じたことをお話することで、少しでもいい影響をもたらすことができればいいなと思っています。

有志活動については、まず『レモネード大作戦』で売上金を被災地に寄付するという活動をしました。そのレモネード大作戦の企画メンバーとなったのが、熊本地震が起きたときと同じような形で、西日本豪雨の水害被災地に対して何かしたいという思いをもってLINEグループへ集まった学生たちだったんです。

学生自身が自分たちの関心をもとに生協祭に出店することで、被災地のことを考えるきっかけになるのがよかったということで、翌年もやろうとなり、レモネード大作戦に参加した人たちの中には熊本地震現地ボランティアに参加した人も多かったので、熊本地震に関わるようなことをしようという話になりました。熊本の名物のお芋と兵庫県の名物のお酒をかけ合わせて、『うまいもん甘酒』を作りまして、西宮と熊本をつなぐという思いを持って、生協祭で出店しました。

出店してみた感想としては、こういったフォーラムに参加するとか、現地に行くとかになると、ボランティアに参加したことがない人だとハードルが高いということもあると思うのですが、生協祭で出店することで、災害にそんなに関心がなかった友達にも熊本のことを知ってもらったり、自分の被災地での活動を話すきっかけになったり



したので、そういう意味でも良かったと感じています。

■津崎 私もこの甘酒を飲ませていただいたんですが、すごくおいしくて。皆さん自分から積極的に活動されていてすごいなと感じました。

学生だからできること…きっかけづくり、 信頼関係の構築

■植田 総合政策学部3年の植田隆誠です。このボランティアが自分にとっては初めての災害支援ボランティアでした。

私からは、第1部のまとめとして、私たち学生が皆さんに伝えたいことをお話ししたいと思います。伝えたいことは3つあります。

1つ目は、「学生だからできることがたくさんある」ということです。具体的には、地域と世代を越えたつながりを作ることができました。ボランティア経験がほとんどない学生や、熊本を初めて訪れる学生がいたことで、地域と世代を越えたつながりができたのではないかと感じています。学生たちは子供たちとも対等な目線で接することができ、お年寄りの皆さんとも、まるで孫になったみたいな感覚で接していました。つまり、まだ社会経験の少ない学生だからこそ、いい意味で遠慮なく住民の方々と接することができたのかなと感じています。その学生の素直な姿勢が、皆さんに受入れてもらいやすかったのではないかと感じています。

そして、学生だからこそやりたいことを実現できる時間と環境があるということも大きいと思います。学生には自由な時間が多く、また、やりたいことができる環境も整っています。今回の現地ボランティアでは、「何かしたい」と感じた学生が、ヒューマン・サービス支援室を通じて、安心して参加することができました。私も熊本地震現地ボランティアが初めての災害ボランティアで参加する前は不安を感じていましたが、学校を通じての募集だったことと、参加者に自分と同じような学生がいたことが安心して参加できる要因になりま

した。

社会人になると、お金があっても時間がない状況が生まれやすいですが、このように学生はやりたかったことをチャレンジしやすい環境にあるので、学生のうちにチャレンジしておくことはとても大切だなと感じました。

2つ目は、「ボランティアは何かのきっかけになる」ということです。ボランティアでは、普段は関わることがない人々との出会いがたくさんあります。学生メンバーの中には、現地の方とまだ連絡を取り合っている人もいるし、一緒に活動へ参加したメンバーと仲良くなり、遊びにいたり悩みを相談しあえたりする関係性になっているという人も多くいます。私にとっては、ヒューマン・サービス支援室とともに活動する「学生コーディネーター」に入会するきっかけにもなりました。

私たちだけでなく、住民の方々にとってもきっかけができたのかなと思います。特に私たちの活動では、ただ訪れるだけでなく、毎回異なる企画を行ったり、異なる学生が参加したりしていたので、住民の方々の非日常を作ることができ、他のボランティア活動よりも多様な出会いが生まれやすかったのではないかなと感じています。

3つ目は、「継続的な活動が信頼関係を構築できる」ということです。継続的に関わったことで、信頼関係ができ上がっていったと感じています。大学の職員さんと現地の住民さんの関係だけではなく、学生と住民、学生と職員、学校と熊本のつ



なかりができていったのではないかと考えています。私が初めて参加したときに感じたのは、住民の方々と職員さん、継続して関わってきた学生との関係が既に出来上がっているなということでした。初参加の私のような学生も、その雰囲気飲み込まれるように住民の方々と接することができました。このような信頼関係が出来上がったのは、継続的な活動によるものだと感じています。

ここまで学生だからできること、ボランティアは何かのきっかけになること、継続的な活動が信頼関係を作るといふことの3つを皆様にお伝えしました。しかし、それらを感じられたのはこの活動の特徴でもある、学生の声を聞きながら大学が主催していたこと、16回にわたって継続的に活動を行ってきたことがあったからだと思っています。大学が運営していたことで、学生の参加費用も安く済み、多くの学生が活動に参加できるチャンスをつかむことができたと思います。アルバイトをあまりしていなかった私にとっても、この活動に参加費5,000円という破格の安さで参加できたことは、継続的に参加したいと思える大きな要因にもなりました。

また、継続した活動は強い信頼関係を築くことにもなりました。学生だけでなく、大学や現地の方々など、多くの人に関わるこの活動は、学生にとっても1つの企画を作り上げる魅力や大変さを感じられる貴重な経験になりました。関わってくださった方々には本当に感謝しています。

私たちから伝えたいことは以上ですが、最後に、次のパネルディスカッションを行う皆さんに、ぜひお聞きしたいことがあります。継続的に活動してみてよかったこととして、私たち学生にとっては現地の皆様との信頼関係を築きやすかったこととお話しましたが、このほかに大学にとって、あるいは住民さんにとって、継続した活動のよかったところなどありましたら、知りたいなと思っています。もしお時間ありましたら御回答よろしくお願いたします。

以上で、第1部現地ボランティア活動参加学生による活動報告「私たちと益城町の4年間」を終了いたします。御清聴ありがとうございました。



第2部 パネルディスカッション「継続的な活動が生み出した学生と被災者の新たな支援の形」

関学生と住民による相互交流と、 成長のプロセス

■室崎 皆さん、こんにちは。兵庫県立大学の室崎です。なぜ私がここにいるのかという理由として2つあります。

1つは、学生の災害ボランティア活動がとても大切なものだとかねがね思っていることです。もう1つは、兵庫県立大学に来る前に、関西学院で5年間、学生たちと一緒に過ごしてきたという経験があることだろうと思っています。前置きは以上です。

第1部ではとてもすばらしい報告をしていただいて、どうもありがとうございます。まさに災害が、ボランティア活動が学生にとってどういう意味を持っているのかを、皆さん方の報告を聞いてると本当によく分かった気がします。すごいなと思ったのは、最初のスタートが、学生自身の非常に素直な気持ちだということ。多分、これが「ヒューマン・サービス」という言葉にもつながるし、関西学院の「Mastery for Service」にもつながるし、困った人を助けることは本来の人間の在り方だということにもつながってくると思います。もう1つすごく感じたことは、継続的な災害ボランティア活動の中で、学生がどんどん成長していく、そんなプロセスを伺うことができたということだと思います。



第1部のご報告からは、学生にとって災害ボランティア活動がどうだったかを中心にお聞きしましたが、最後に質問があったように、地元の人にとってみてどうだったのか、関西学院の学生さんと一緒に災害からの復旧・復興に努めてこられた、益城町からお二人の方にパネラーとして参加していただいておりますので、まず御意見を聞きたいと思っております。

まずは、熊本YMCAの佐藤さん。当時は木山仮設の支援をされていたように思いますが、佐藤さんから、関西学院の学生についてどう感じて、どう思ったかということ遠慮なくお話いただければと思います。よろしくお願いたします。

■佐藤 熊本YMCAの佐藤といいます。私は、地震の直後開設された避難所での活動から関学の学生さんたちと関わらせてもらっています。第1部のご報告を聞いて、知らなかったこともあったので、結構驚いたこともあります。コーディネーターさんが「熊本にボランティア行きます、誰か行きますか」と言って、手を挙げた人が来る、そんな感じで来られていたのかなと思っていたのですが、学生さんが自主的に立ち上げられたり、グループを作ったりというのを聞いて、結構驚いたところです。他にも活動の前に2か月準備をされてきたこととか、驚いたところがいくつかありました。

僕たち(YMCA)は住民さんと関わることが多いですが、住民さんは僕たちが行っても「ああ、また来たか」とか「また同じこと聞かれている」とか思われている方も結構いらっしゃったり、なかなか、こちらから出てきてもらいたいなと思って呼びかけたりしても、出てこれないこととかもあるのですが、「関学が来る」「学生さんが来るよ」と言うと、どこにこんなに人がいたのだろうというぐらい集まっていたので、全然ありがたい迷惑なんてことはなくて、次はいつ来てくれるかな、また来てくれて嬉しいな、と思っていました。

■室崎 もうお一方、今度は仮設住宅の居住者だった宮崎さんに来ていただいておりますので、宮崎さんからもコメントいただければと思います。よろしくお願いします。

■宮崎 皆様、こんにちは。お元気ですか。熊本のおばあちゃんです。

学生が来てくれたとき私は馬水東道仮設住宅におりまして、今は少し離れた場所にある家のほうにいます。今でも木山仮設でサロンを開いています。学生には15回ほど来ていただいたのですが、住民みんな喜んでおりました。中には、子供たち（学生たち）に教えることがあったり、教えられたり。おばあちゃんたちも若い子と接することができて、若い子の元気をもらって、大変喜んでくれていました。「今度は宮崎さん、いつ来るの」ってみんなが言うってくれるから、子供たちが来てくれるのを楽しみにしているのだなと感じていました。

暑い中、地震の中、よく益城まで来たいと思う気持ちがあったなと思って。子供たち自身が夏休みでデートや海や、行くところがあるのに、益城に行こうと思って実際に来てくれる、その気持ちがすごくうれしかったです。みんな素直でいい子ばかりで、熊本のおばあちゃんとして、みんなそれなりに、何か感じて育っていったのかなと思います。

■室崎 被災地の皆さんからしたら、学生の力って大きかったと思います。何よりも皆さん災害の苦しみから立ち上がっていく上で、若い力が刺激になったことだろうと思います。だから、被災者の皆さんにとっても大きな力になったし、逆に言うと、今度は学生が被災地の皆さんと一緒に心を通わせることによって、学生自身もまたいろんな学びがあって、育っていく。お互いに育っていくというか、元気になっていく。相互の交流のプロセスがあるのだろうと思っています。

それに加えて、宮崎さんのことをおばあちゃんと言うと失礼ですけど、おじいちゃん・おばあちゃんと大学生の世代を超えたつながり。先ほど学生の報告であった、大学生と、小学生だとか小



さな子供さんとのつながり。まさに世代を超えているというか、大学生の力があると思います。大きな大人と小さな子供の間をうまく学生がつないでいって。だからこそ、みんなが元気をもらえたり、心を通わせることができたりした意味でいうと、学生の力は多分大きかったように思います。

■佐藤 今、室崎先生も言われたように、お互いの成長を感じていたところはあって、避難所の際の活動と仮設に移ってからの活動では、やっぱり内容が違っていったり、仮設でも最初は子供たちとの関わりが多かったりしたところで、でもその後、時間がたってからは高齢者の方の個別のニーズに対応することまで学生たちが考えてされていたのとかを思い返すと、成長されていたように思います。僕たちもボランティアの見方とか、避難所の際とは変わったところもあって、お互いに成長していたなと思います。

■室崎 宮崎さん、さらに何か付け加えることはございますか。

■宮崎 いろんな方と出会ったと思うんです。子供から大人まで。そこからボランティアに来たという意味を子供たち（学生たち）が感じて、自分の人生の糧になれたらいいなと思います。何か始めようと思うきっかけがないと、ボランティアに行こうかなというの、自分が望まないと行けないことでしょう。それを自分が望んでくれたことが、子供たちにとって意味があるんじゃないかな。ボランティアに来ない子よりかは、たくさん色々なことを見てくれて、成長したと思います。

継続した関わりから「日常生活の当たり前」 を取り戻すきっかけに

■室崎 第1部の学生の皆さんの報告の中に、「繰り返し益城町に来ると、地元の人がお帰りとお声をかけてくれる」とお話がありました。その関係ってすごいですよね。やっぱり第二のふるさとというか、本当につながりを感じさせてくれたと思っています。

学生の皆さんの話の中で、大学のヒューマン・サービス支援室だとか、大学に対する感謝の言葉がすごく多くて、本当は学生に「もうちょっと大学にこうしてほしい」という不満はないのか聞いたかったですけど。(笑)学生の皆さん、すごく大学の後方支援に感謝されているような感じを受けましたが、では送り出す側、大学側が熊本益城町支援で何を考えていたか、あるいは何を感じたか、お話伺いたいと思います。堀之内さんいかがでしょうか。

■堀之内 2016年度から2019年度までボランティアコーディネーターをしていた堀之内です。

第1部の学生の話を聞いて、改めて4年間の活動を振り返って、学生たちが現地での活動と帰ってきてからの事後の活動と、いろんな活動の広がりを見せていて、改めてこの活動を継続する意味って、そこに表れてるなとすごく感じました。

2016年、ヒューマン・サービス支援室が立ち上がった当初に熊本地震も起こりまして、先ほど窪田さんからも説明があったように、学生からす



ぐに相談を受けて、熊本地震のために何か動けないかというところで、ずっと相談に乗って来ました。私自身も関西学院大学の卒業生なのですが、在校生の頃は東日本大震災の被災地に4年間通っていたこともあって、被災地での活動をするときには、継続的なプログラムにしたいという思いがありました。

そういう思いから、学生と一緒に考えていく中で結果的に4年間活動できたのですが、継続するということ、最終的に学生の力でいろんな広がりを見せたところは、一緒に活動していて私にとっても学びになる活動だったと思っています。継続したことによって、現場では信頼関係がどんどん積み重なっていくので、初めて参加する学生も安心して活動できるというのができたかなと思っています。

一方で、学生が帰ってきてから大学内で自分たちがどんな活動をしたのかとか、そこでどういう気持ちだったのかを伝えて広げるという活動をしてきたので、実際にこの熊本のプログラムも口コミで学生たちの中で広がっていったこともあって、大学内で広がりを見せたところは、継続した点ですごくよかったなと思っています。あと、回を重ねるごとに経験者も増えていくので、学びも深まっていったと感じています。

あとは、毎回違う学生が参加することもあって、同じ現場・同じ仮設住宅に行っているけど違う学びがあって、それも継続した意味があったかなと感じています。

■室崎 もうお一方、大学の送り出す側になるのですが、ヒューマン・サービス支援室の室長をされている関先生からコメントいただければと思います。

■関 御紹介いただいた通り、熊本地震現地ボランティア活動の運営していたヒューマン・サービス支援室の室長しております、関といいます。

私も、災害ボランティアの研究をずっとしていた関係もあって、堀之内さんがおっしゃったように、継続して現地に行く仕組みが一番重要だと思っていました。

実はヒューマンサービスセンターがあった当時、東日本大震災が発生したときに4年間継続して現地での活動をしていました。その経験を生かしながら、行きっ放しではなくて、何か学びとして1つの形になるようなものも考えいかないといけないなという思いがあって、この活動を進めていました。

活動を進める上で、3つのことを重視して考えていました。

何よりも1番は、「現地の方々に元気を届けるような支援」として、しっかりした活動にしたいということです。2つ目として、やはりいろいろな学部や学年、場合によっては国籍も越えた色々な学生さんたちが参加してくれたので、異種混合というか、「違ったバックグラウンドを持った皆さんと共に刺激をし合える活動」が作りたいなと思っていました。サークルとかではあるんでしょうけれども、いろんな学部が集まって1つのことを目指すのは、すごく珍しいことかなと思うので、できる限り色々な学生さんたちが混ざり合って繋がりを作るということも、ボランティアコーディネーターの堀之内さん、岡さんが中心になって考えてくれたのかなと思いました。3つ目として、関西にいと熊本で何が起きているのか、もう終わったのかなと思っている人も多くいたとは思いますが、「益城町に住む方々の暮らしぶりや現状を伝えて、関心を持ってほしい」と、参加してくれた学生の皆さんにミッションとしてお願いしていました。

ということでいろんな機会、いろんな形で工夫をしながら学生さんたちがやってくれました。ポスターを作ったこともありますし、冊子を作ったこともあります。第1部の報告にもあったように、ラジオも1つの形となったのは、すごくよかったかなと思います。

長くなりましたので最後に一言だけ言いますと、災害で被災された方々はいろんなものをなくされたと思いますが、その1つが「日常生活の当たり前」だと思います。当たり前で今まであったことが、災害によってなくなってしまった。これ



を何とかして私たちの関わりで、また作り直すきっかけが提供できたらなという思いで、継続することが重要だと考えていました。

継続することによって信頼もそうですし、学生が来ているんなことをすることが当たり前になってきたとか、そういう当たり前が皆さんの中に少しずつできてくると、次の生活の建て直しに後押しできるのかなと思いがながらやってきました。

今、実は私、御挨拶も兼ねて熊本に来ています。目の前に宮崎さんもいらっしゃるし、隣の部屋には佐藤さんがいらっしゃいます。昨日、この辺りを回ってきたのですが、皆さん、コロナの中で大変な中ではあるのですが、だんだんと生活が戻ってきたのかなということが分かり嬉しかった、ということも付け加えてお伝えしたいと思います。

■室崎 学生の災害ボランティアは、1つは、何よりも被災地に貢献するというか、被災地のいろんな苦しみを和らげていくという意味でいうと、まずは被災地のためにならないといけないということです。2つ目に、第1部の学生の報告を聞いていると、それは同時に学生のためにもなっていて、学生が現地で学ぶことで、大学の中では得られない学びをたくさん経験して、最終的には学生がすごく成長して帰ってくる。そういうことなので、まさに学生自身のためという意味もありますね。

その2つかな、と思っていたんですが、3つ目として大学のためにもなることが分かりました。

行った学生だけではなく、周りの学生にもいろんなインパクトを与えていくし、あるいは入れ代わり立ち代わりいろんな学生が支援に入ることによって、熊本での活動の経験の総和が大学の財産になっていると思うので、大学にとっても大切な意味を持っている取り組みだと思えますから、地域のため、学生のため、大学のために、災害ボランティアはとても大切だと今話を聞いて感じたところです。

そういうものを実現するために、関先生も言われましたけどまさに「継続性」と「信頼関係」みたいなものが、その根幹にあるのだろうと思っているところです。

継続した「ボランティアサイクル」が 育む学びとコミュニティ支援

■室崎 今度は、大学の送り出す側の御意見と、迎え入れていただいた熊本の皆さんの御意見を聞いて、学生の皆さんがどう感じたか、ちょっとお聞きしたいと思っています。まず卒業生の御三方、いかがでしょうか。

■森 皆さんの懐かしい声と、関先生のまるで授業を聞いているような感じになるお話、学生に戻った感じがしてすごく新鮮で、今日参加してよかったなと思っています。

改めて、卒業して、今、自分が社会人になった立場でこの経験がどう生きたのかを考えながら聞いていたのですが、1つは「瞬発力」を得たかなと思いました。私は今、東京にいます。先日大きな地震があって、自分自身も身を守るために瞬発的に机の下に隠れたりとか、あとは知り合いとかがいるので、連絡をすぐ取ったりというので、学生時代に地震や防災を学んだことや、現地で生の声を聞いたこと、経験が、今の自分の生活の中で防災の観点から瞬発力、あとは情報のキャッチ能力みたいなところにもつながったなと思っています。それは大事なことだと思いますし、その視点がなければニュースや新聞を見てもどうしても人ごとになると思っているの、現場での

経験をさせていただいたことが大きかったと思っています。熊本のこと、すごく気にかけていますし、また遊びに行きたいと思っています。

■窪田 皆さん、すごくお久しぶりで、懐かしいような、とても嬉しい気持ちでお話聞かせてもらっていました。

私は熊本地震現地ボランティアに2回参加して、その経験が今の仕事につながっているなと思っています。今は福祉関係の仕事をしているのですが、熊本に行かせてもらった当時、私は最初「支援をするぞ」という意気込みで、すごくおこがましい思いで参加をしていたなと思うのですが、1回目の活動に行ったときに、「何か、あれ？違うぞ？」というもやもやがすごく残って、持って帰って、1年後に2回目の活動に行かせてもらったんです。そのときに、私たちのほうが逆に元気をもらって帰ってきているというか、いろんな学びのチャンスをもったり、皆さんとの触れ合いやお話を重ねていく中で、すごくパワーが積み重なっているというか、チャージされていくような感覚になったというのが印象として残っています。つまり、支援する、されるという関係性を越えた何かが、その場にはあったなと思います。私は今、いわゆる支援者みたいな立場で仕事をしているのですが、そうじゃない関係性というか、ただ「人と人」として向き合っていくのがすごく大切だと気づかせてもらったプログラムだったなと思っています。



■**室崎** 支援する、されるの関係を越えた1つの一体性みたいなものが、多分、この災害ボランティアのとても大切な部分だと思いますし、森さんと窪田さんの話を聞いていると、社会人になってもそれが生きているのは、とても素晴らしいことですよね。そのときの経験が一回りも二回りも人間を大きくして、その力が社会人としても、しっかり社会に向き合っていける力になっているということだと思います。続いて、菅さん、どうでしょうか。

■**菅** 現地へ行ったときに関わった住民の方々から直接「ありがとう」という声をかけていただくことはあったのですが、こういう形で改めて私たちが行ったことの意義を聞くということは今までなかったので、私たちの活動を喜んでもらっていたのだなということが分かって、すごく嬉しいなと思いました。

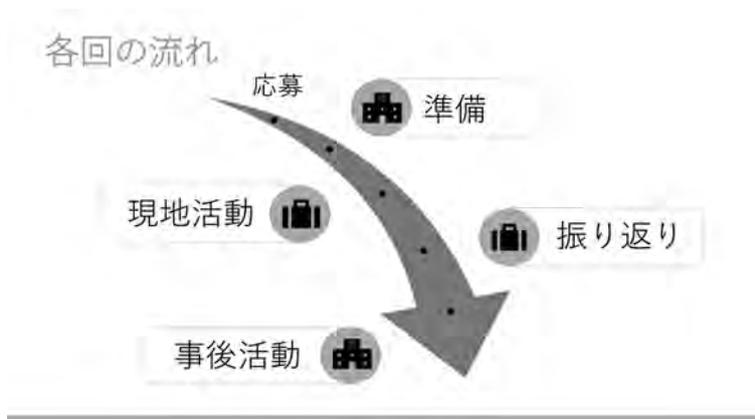
大学生みんなで集まって災害支援をしたことによって喜んでもらったのかなと思うし、そういう場を大学が作ってくれて、さっき植田さんも言っていたように費用も補助していただけたことなども踏まえて、自分1人ではできることが少なかったと思うので、そういう場に関わられて、現地の方にも喜んでいただけたというのは、すごくいい経験だったのだなと改めて思いました。

■**室崎** それでは、現役の学生の皆さんの御意見もお聞きしたいと思っています。皆さんいかがですか。

■**山口** お話をお伺いして、熊本の現地の方々も私たちが行くことで喜んでいただけたことが知れて、本当に嬉しいです。私は、皆さんのために何かをしたいという気持ちでいたんですけど、それよりも一緒にその空間で楽しむことが、学生にとっても、現地の方にとってもいいことなんだなと思いました。

■**神保** 堀之内さんがおっしゃっていた、「どういう気持ちで活動したか」というのを後から振り返りなどで深められたからこそ、口コミで広がり他の学生に影響を与えたりしていたと聞いて、あまり自分自身でそういう自覚はなかったのですが、思い返せば「熊本行ってきたよ」と言ったら、「え？何しに行ってきたん」という感じで聞かれて、そこから話が広がっていったという経験もありました。あとは有志の活動に私自身も参加させていただいたんですが、森さんや菅さんのように企画された方々が熊本の活動を広げてくださったからこそ、私も何度も熊本を思い返して、こうやって発信する場を作れているのだなと感じました。

■**今村** 5年前に熊本で地震が起こって、まさか5年後の今日に、こうやって皆さんで集まってZoomで何かをしているというのは誰も予測していなかったと思うので、継続が大きい輪っかみたいなものを作ったのかなと、しみじみ感じています。



■室崎 山口さん、神保さん、今村さんのお話を聞いていると、「ボランティアサイクル」ってあると思いました。2つのサイクルがあって、1つは、ボランティア活動をする前に準備を丁寧にし、ボランティア活動をした後で振り返りもきちっとやって、単に現地での活動だけではなくてその前と後ろをしっかりやられていたことが、1つの連続性というか、振り返りを次の準備に生かしていく、まさにボランティア活動のサイクルになったのだと思います。もう1つは、学年を超えてというか、先輩から後輩にという形で、次々バトンタッチしていくようなサイクルが生きているように思うので、継続はまさにそのサイクルを続けていくことなのだろうと感じました。

津崎さん、植田さんはご感想いかがでしょうか。

■津崎 私自身、ボランティアに行く前は、「動いて働く」みたいなイメージがあって。でも、実際にこのボランティアに参加したときは、住民の方とお茶を飲みながらおしゃべりしたり一緒に過ごしたというのが殆どで、本当に熊本の皆さんの助けになっているのかな？って、帰ってから思うことがあったんです。でもこうやって継続したことで、今日、益城町の皆さんが次に来てくれるのを楽しみにしていたというお話が聞けたり、普段は出てこない方々でも私たちが行ったことによって家から出てきてくださったというお話を聞くことができ、自分たちの活動がちゃんとためになっていたのだなと感じることができてよかつ



たです。

■植田 今回、フォーラムの実行委員になって、皆さんと今日こういうふうにお話している中で、すごく一体感を感じました。僕が現地に行ったときに一緒に活動した人は神保さんと菅さんですが、他の回に参加した人もみんなまとめて「現地に行った人なら家族」みたいな感覚になりました。宮崎さんも熊本のおばあちゃんとおっしゃっていましたが、そういう、仲間というか一員になれた、その一体感を感じました。よかったです。

■室崎 学生の皆さん、いろんな意味で現地での活動がプラスになっていますが、根底にあることの1つは現場力というか、被災地の苦しみも行かないと分からないということだと思います。話で聞いているだけでは分からなくて、行ってその現実を見る、同時に被災者の苦しみとか喜びみたいなものも、被災者と一緒になって話し合ったり、一緒になって行動しないと分からないということもあるので、そういう意味で学びがたくさんあったらと思うています。

今の学生さんの意見を聞きながら、被災地の皆さんはどう感じたか、またお話を聞きたいと思います。まず、宮崎さんどうですか。すごく皆さんから慕われていて、親子のような関係を感じたんですが。この学生たちとのつながり、一緒に活動していて、どういう気持ちでおられたかを含めて、御意見をお聞かせいただければと思います。

■宮崎 久しぶりにみんなの顔が見られて、元気そうよかった。大分成長したなと思いました。いろんな人と出会えて、いろんな経験をして、いろんな形の絆がいっぱいできたと思うんです。人とのつながりの絆を大事に、これからも生きていく上で、人生の中で大事にしてほしいなと思っています。みんな顔もしっかりしてきたなとか思いながら（笑）これからも前向きに生きてもらえたらなと思います。

■室崎 最初に来たときより、どんどん大きくなってきて。本当、子供を見る目ですよ。立派な大人になったと感じられているかもしれない。

それぐらい親しい関係というか、そういうものがそこに生まれているんだろうなと思っています。佐藤さんはいかがでしょう。

■佐藤 学生さんたちがお話された中で、お茶飲んでしゃべっていて、それで本当にボランティア？という感じで思われていたということが分かりました。もちろん被災直後の現地でのボランティアもすごく大事だと思いますけど、このお茶飲んでしゃべってというところが孤立を防ぐ上でとっても大事で、今日のテーマになっている「継続」につながってくると思うんです。

この孤立って、阪神・淡路大震災とか東日本大震災のときからも言われていて、分かっていたことでもあったと思うんです。避難所に行ったときにコミュニティーが崩れて、なくなった。また、避難所から仮設に行くときに、またコミュニティーが変わって。さらに仮設住宅から災害公営住宅に行くときにコミュニティーがなくなってというところで、そこで孤立を感じるという言葉って、ずっと聞こえてきていた言葉で、やっぱりそこをどうにかしないといけないと、みんなが思っていたことではあるんです。でも、なかなかできていないところでもあったので、継続して活動を続けることが結果的にコミュニティー支援になっていたことは、すごく助かったところです。

被災直後は、支援に行きたいという人、何万人という多くの方が来てくれたんですが、その後継続する、コミュニティー支援はどんどん減っていると感じていたので、すごくありがたかったです。

関西に帰られた後も、ラジオで発信したりしてくれているのも聞いて、災害は次から次に違うところで起こったりしていることもあって、熊本地震はそういった発信がなければすぐ忘れられていくとも感じていたので、今回の発表でそんなお話も伺えて嬉しかったです。

■室崎 最初の佐藤さんのお話の中であったように、関西学院の学生たちがやってくると、住居に引き籠もっていた方々もどんどん出てくるということは、とても大きな力ですね。ひきこもりというか、仮設の中でじっとしている人たちを、ど



うやっとうまく皆の交流の輪の中に参加してもらえるか。そのためのいろんな知恵とか工夫とか、そういうものがあつたのだろうと思っています。

大学と学生が一体となり災害ボランティアを継続する意義

■室崎 今までの話を聞いていて、関先生、どうですか。関先生は東日本大震災や、新潟県中越地震のときから、もっと前からもやられていたと思いますが、いろんな被災地で学生たちと一緒に支援活動をしたご経験があると思います。関西学院の学生の熊本支援は、従来の学生の支援活動からさらにどこが大きく成長したか、今までと同じかどうか、その辺りも含めて御意見いただけるとありがたいです。

■関 もちろん、これまでと同じく変わっていないというか、若い学生が行くことで現地の方々に元気を届けるとか、学生がそこでボランティアってどんなことをすることなのかとか、人との関わりでいろんなことを考え直す機会であったのは、変わらず今回の熊本でもあったかなと思います。

今回、継続してというときに特徴的だったこととして、被災直後から仮設住宅、生活再建といういくつかのステップを踏む過程に関わらせていただいたことがあると思います。仮設にも3年近くにわたって通わせていただいて、言い方がちょっと変かもしれませんが、最初は学生ボランティアと被災者、という役割同士の関係だったも

のが、継続することで、関学生の〇〇さんと宮崎さん、関学生の□□さんと佐藤さん、という固有名詞になっていった関係がどんどんできていったように思います。続けていくうちに学生同士の関係もできてきて、初めて行った学生でも、行く前から「何とかさんという人がいるらしい」と聞きながら、例えば宮崎さんという人がいて、たまに厳しく言われるけども、たくさん御飯食べさせてくれるとか。そういう話がいろいろと回っていて、個人と個人の関係というか、もう少し言うと人と人との関係が出来上がったなということがあります。先ほど室崎先生がおっしゃったように、大学としてもこうやってサポートすることが、いろいろな財産になることも少しずつ分かっていただけたこともこの活動を通じてできたことだと思います。今まではどちらかという、個別、個人の活動であったものが、大学の組織としての活動として意味があることを理解していただいた活動になったかなという感じはしました。

■室崎 堀之内さんも、ご自身が学生の頃からボランティア活動をやられていて、今度はヒューマン・サービス支援室に入られて学生を支援する側に回られましたけど、送り出される学生の視点と送り出す大学の視点、両方を見てこられた立場として、何を感じておられますか。

■堀之内 先ほど宮崎さんが、この活動が人生のきっかけになってくれたらいいなとおっしゃっていたこと、そういう大きな気持ちで学生たちを受入れてくださっていたことがまず嬉しいことだし、ありがたいことだなと思って聞いていました。

人生のきっかけとか、何かしたいけどあと一歩が踏み出せないというときのその一歩って、なかなか学生自身が一人で見つけたり踏み出すことは難しいというのを感じていました。何かしたいんだけど勇気がないとか、やり方が分からないという学生は結構いると思っています。

今日、いろんな学生に話してもらいましたが、このプログラムがそのきっかけの1つになっていたことが分かって、大学が、学生の何かしたいという気持ちに寄り添うことが一歩踏み出すきっか

けになれるんだと分かったので、大学としてプログラムを作っていくこと、継続していくことは、学生の今後の人生を変えていくのだなと思います。

■室崎 最後に言われたことはとても重要で、大学として、まずは学生の自発性を抑えてはいけなくて、自発性を尊重しながらだけれども、大学の大きな意味での教育として、とても大切なプロジェクトだと位置づけて、むしろ大学こそ継続的、持続的にしっかり支援をしていく。私がわざわざ言うことではなくて、ヒューマン・サービス支援室とか、そういう体制をちゃんと作っておられて、しっかり支援されていること自体がそうだけれども、もっともっと大学として、しっかり位置づけることが必要かもしれないです。

ボランティアに参加した学生さんの意見を聞いていると、災害ボランティア活動が非常に大きな力を発揮していることは確かです。それを大学として、さらにしっかり受け止めていく。お金を出すとかそういうことだけではなくて、大学として学生をどういうふうに育てていくかという視点から、むしろ、今度は大学と被災地が一緒になって学生を育てる。堀之内さんが言ったことと近いですが、学生は現地に支援しに行っているつもりだけど、逆に宮崎さんは学生を育てるつもりで接しているようなところもありますよね。まさに親子の関係みたいなものがある。まさにそういう被災地からも力をもらったり、いろいろ教育をして



もらっているようなところがあるので、相互教育というか、現場の教育と大学の中の教育を有機的に結合するようなプログラムがもっとあってもいいような感じがします。

今日は、学生の皆さんの気持ちがいっぱい聞けてよかったです。学生が行って、何を感じて、何を考えているか、こういう形で分かること、とても大切なことだと思います。

最後に関先生、全体を通じて、まとめ的な発言お願いできればと思います。

■関 まず、大学として位置づけてきたことが、ヒューマン・サービス支援室自体は小さな組織ではあるのですが、学生に与えているインパクトというか、教育的な意味合いはすごく大きいと改めて感じました。ということで、また自信を持って、色々なところで必要性を主張していきたいと思っていますし、皆さんの声をできるだけ届けていきたいと思うのが1つです。

もう1つは、学生時代って意外と多様なバックグラウンドを持つ人に会う機会がないのだなと改めて思いました。そういった中でこうやって学生のことを思って接してくださる方々に出会えたことが本当に幸せだったなと思いますし、大きな形の継続は難しいかもしれませんが、学生たちが、あるいはこういった組織が続けられる応援、できる道をこれからも考えていきたいと思いました。

■室崎 今日話を聞いていても、やはり関西学院の皆さんが、熊本の益城町の支援を4年間継続してしっかりやられたことの大切さみたいなものが、肌で感じるのが私自身もできました。皆さんのとても素敵な話をお聞きできてよかったですと思います。どうもありがとうございました。



第4部 室崎益輝氏による今後の展望・まとめ「学生ボランティアが被災地に関わる意味」

■室崎 まとめとして、5つのキーワードを出して、その意味するところは何か、お話ししたいと思います。

1つ目に、一番重要なことは、「共感と信頼」です。共感とは、共に感じるエンパシーというか、同じ仲間だという意識がとても重要だと思うんです。逆に言うと、学生がボランティアをする場合に、上から目線で助けてあげるとか、何かしてあげるといふときに、当初はそういう気持ちがあったとしても、活動をする中ではその状態にはいけないと思っています。まさに被災者の思いというか、寄り添うということかもしれませんが、被災者の気持ちになって、一緒に目の前にある困難や課題を解決していくんだという意味の、やはり一体性とか信頼性だとか、そういうものを大切にする。学生からすると、常に被災者の気持ちになる。もし、自分が被災者だったらどうしたいか、を考えていくことは一番重要だと思います。

2つ目は、現場で学んだことを大学で、あるいは次の社会で生かすというか、「自分の人生に生かしていく」ことだと思います。我々は「現場知」とか「専門知」と呼んでいます。現場でしか学べないことはたくさんある。だけど、現場で学んだことだけでは、それが社会的な、普遍的な原理というか、社会を変える力にはならず、それを今度は大学に持ち帰って、自分の研究だとかそういう分野の中で意味づけることをして、より普遍的なものにする。あるいは今まで学んだことを踏まえて、その現場の問題を解決する、現場と大学をつないでいくことが必要です。要は、被災地に支援に行っても、それは単に被災地の問題ではなくて、自分自身の研究や学習に反映させていく姿勢が必要なので、そこで学んだことを大学でより深める努力をしないとイケない。災害ボランティアは被災地に行って、行ってる間だけではないし、行って終わりではないんだとしっかり頭に入れておかないとイケない。研究テーマが全く違う人もいますが、でも被災地の課題は社会の縮図み

たいなもので、ありとあらゆる問題がそこにあるので、その問題をしっかり拾ってきて、大学の中で、あるいは社会の中で解決していくことがとても大切なので、現場と大学をしっかりと結びつける姿勢が要ると思っています。

3つ目は、今まで言ったことと少し重なるんですが、キーワードでいうと「下ごしらえと振り返り」です。第2部では「ボランティアサイクル」と言ったんですが、皆さんが言われた振り返りはとても重要だと思います。その振り返りを次につなげる。先ほどでいうと、被災地で学んだことを振り返りながら、今度は大学に戻ってきて、それをどう深めていくかが必要なので、次につなげるためには振り返りが必要だし、同時に準備が大切です。関西学院の学生は準備に相当力を入れていましたよね。準備もなしにふらっと行く場合もあるんですけど、被災地の状況を知る、あるいはどういう課題があるのかということをも念に調べて、下ごしらえというか準備活動がすごく充実していたように思います。まさに準備と後の検証、下ごしらえと振り返りですね。特に振り返りをしっかりすること、心がけることが指摘できるのではないかと思います。

4つ目は、「支援の多様性と自発性」というキーワードです。支援に決まり切ったパターンはないです。被災直後は、例えば水害だと泥出しをし



ないといけないとか、地震だと瓦礫片づけをしないといけないとか、緊急を要する課題は当然ボランティアのメインテーマになるんですが、時間がたつにつれて、ボランティア活動はとても多様になります。これもさすが関西学院のボランティアだなと思ったんですが、子供と一緒に水遊びをしたり、ゲームをしたり、遊んだりということを重視されていましたよね。子供の遊びも必要だし、おじいさんおばあさんと話をする、コミュニケーションを大切に、ひとりひとりの思いだとか、そういうものを聞き出すことも重要なボランティア活動で、とても幅が広いし、必要なことだと思います。例えば、「ボランティア行きませんか」と誘ったら、いや、私はああいう力仕事はできないんだ、というパターンがよくありますが、そうではなくてまさにいろんな分野に広がっていているので、多様性を大切にしながら、そこに少し自発性とか自主性を入れていって、新しい支援というか、被災者に寄り添って、被災者が求めているニーズにしっかり応えていく。多様な活動を展開することですよね。誰でも参加できるし、誰でもボランティア活動ができる。ボランティアで行くと聞くと、泥出しとか瓦礫の片づけとイメージする人がいるけど、それだけではない。もっと多様な活動が存在するし、それが求められているんだという意味で、多様な活動を作り出していくことが必要ではないかと思うところです。多様性はとても大切ですね。

5つ目として、重要なことはグループというか集団性というか、1人で行って1人で勝手にする形ではなくて、まさに「人のつながりとチームプレー」だと思うんです。関西学院の学生、そのほかの大学の学生もそうですけど、バスに乗って一緒に行くとか、船の中で一緒に時間を過ごすことで、お互いが刺激をしながら、一緒に活動する中で共に成長していくというか、お互いの気持ちを知り1つの刺激として育っていくプロセスはとても重要なので、やはりグループとして、チームプレーとしてボランティア活動することも大切だと思います。大体私から言うことは以上です。あと、

私の足りないところを補足してやろうという方おられません。第3部に各班でこういう話があったよということがあれば、お出しただけであればありがたいなと思いますが、いかがでしょうか。

■植田 私の班で出たことを言ってもいいでしょうか。学生だからこそできることを室崎先生も考えたいとおっしゃっていたんですが、その点について1つ意見が出ました。関学の事務職員さんからいただいたご意見だったんですが、「学生は学内であれば場所もすぐにとることができる」という強みがあるのではないかということです。社会人の方だったら、いちいち市民センターとかを予約して場所を取らないといけないけど、大学であれば同じキャンパスで1か所に集まって、一緒に話し合う、準備することができるというのは、学生はそういう部分においても恵まれているので、活用してほしいと話されていて、確かにそうだなと感じました。1か所に集まることができれば、知らず知らずのうちに先輩方との引継ぎとかも、自然にできていくのではないかという意見もありました。

■室崎 それも学生だから、あるいは大学だからできることなので、そのメリットはしっかり生かすといいですね。結論からいうと、大きな災害が起きたときは、大学なり学生ボランティアの人は、その力を積極的に発揮してほしいと思うんです。

とはいうものの、最近、学生はとても忙しいです。授業に出ないと単位がもらえないとか、就活で会社訪問を一生懸命しないといけないとか、毎日のアルバイトに忙しいとか。そういうことかというと、誰もが自由な時間を持ってるわけではないです。だから、学生の中でも、自由な時間を持っていて現地に行ける人もいるし、本当は現地に行つて人のために何かしたいと思っているけど、そういう時間がない人もいますので、学生の中にも非常に多様性があります。そうすると、それぞれの置かれた立場で何ができるか、おまへはボランティアに行かないから、けしからん、なんてことは絶対あってはならないので、学生もいろんな状況に置かれていて、それは大学生もそうだし、社

会人もそうで、お互いの置かれている状況を理解し合うことも多分必要なような気がします。

■植田 その点に関しても、できる人が、できるときに、できることをするのが大切ではないかとおっしゃっていた方もいました。そのとおりだなと感じました。

■室崎 これ、とても重要なことです。無理やりとか嫌々という形ではボランティアではないです。自分もボランティア活動をして、とても楽しいとか、生きがいを感じるとか。まずそういう形でなければならないし、まさにできることをできる形です。とても重要な原則なので、学生としての本分は、学生として自分の学問を極めることもあるので、自らの生活に合わせながら、ボランティア活動を追求することはきっと必要だと思います。

以上をもってまとめとさせていただければと思います。皆さま、本日はどうもありがとうございました。



災害支援フォーラム実行委員 感想

法学部 4年

山口 真奈

熊本地震現地ボランティアは、私にとって初めて参加したボランティアで、大変思い出深かったのですが、フォーラムの実行委員はぜひ携わりたいと思い、参加しました。

最初は、ボランティア活動には意義があったのだろうか、振り返りながら不安になっていたのですが、先輩方や実行委員のメンバーとお話していくうちに、大学生だからできたこともあるのだ、と気づきました。フォーラムはオンライン開催となりましたが、人と人とのつながりが画面越しにも感じられて、素敵な会になったと思います。貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。



国際学部 4年

今村 康佑

最も嬉しかったのは、学生が現地ボランティアに参加することを楽しみにしていたように、現地の方々が学生の訪問を心待ちにしてくださっていたことを知れたことです。また16回にも及ぶ現地ボランティア活動は、私の知らないところでたくさんの支えがあって成り立っていたことを知り、活動の継続を通じて見えない大きな輪ができたような気がしました。ボランティアの形は様々で、誰もが気軽にこの大きな輪に参加できるということ、フォーラムを通じて感じることができました。益城町の皆さまをはじめ、関わってくださった皆さま、本当にありがとうございました。



総合政策学部 3年

植田 隆誠

実行委員を務めて良かったと感じる理由は3つあります。

まず、熊本地震現地ボランティア活動の最後の締めくくりとなるフォーラムに関われたからです。卒業生とも関わりながら活動を振り返れたことは、この活動の本質を知る事にも繋がりました。

次に、現地の方々の声を直接聞くことができたからです。活動中は、関学生が訪問する意味について疑問に思う事もありましたが、今回、それが払拭できて嬉しかったです。

最後に、学生のボランティアについて更に理解が深まったからです。参加者それぞれの視点から意見を伺えた事は、私達が今後の活動に新たな視点を加えるきっかけにもなったと思います。お世話になった皆さま、ありがとうございました。



記錄事項

災害支援フォーラムチラシ

**継続的な活動が生み出した
学生と被災者の新たな支援の形**
～『熊本地震現地ボランティア』4年間の活動を振り返って～

関西学院大学主催 災害支援フォーラム

日時:2021年10月9日(土)13:30~16:15
※オンライン(Zoom)にて開催

関西学院大学では、2016年度～2019年度の4年間、熊本地震現地ボランティア活動に取り組んできました。計15回の活動に参加した学生数は延べ302名。多くの学生と取り組んできた現地ボランティアでは、学生と被災者による新たな支援の形が生まれました。活動を振り返りながら、継続的な関わりだからこそできること、大学や学生が関わるからこそできること、そしてこれからの災害支援について皆さんと共に考えたいと思います。ぜひご参加ください。

申込み URLもしくはQRコードからお申込みください。
<https://forms.gle/7GNfKqxDetoMbrjR7>

定員 300名
参加費 無料
締切 10月6日(水)

要事前申込
参加費無料

お問い合わせ
関西学院大学ボランティア活動支援センター
JYOUMAN・サービス支援室
〒662-8501 兵庫県西宮市上学園1番町1-155
☎0798-54-4061 ☒kg.hssso.info@kansai.ac.jp
HP: https://www.kwansei.ac.jp/c_volunteer

日時:2021年10月9日(土)13:30~16:15
※オンライン(Zoom)にて開催

13:15開場
途中休憩あり

第1部
現地ボランティア活動参加学生による活動報告
私たちが益城町の4年間

第2部
パネリストディスカッション
継続的な活動が生み出した学生と被災者の新たな支援の形

第3部
参加者同士の意見交換会
私たちが紡ぐ未来～学生ボランティアができること～

第4部
宮崎益輝氏による今後の展望・まとめ
学生ボランティアが被災地に関わる意味

第2部 パネリスト紹介

<p>室崎 益輝 氏</p> <p>モデレーター</p> <p>経典系大学卒業。経済学専攻。2009年からは学生ボランティア活動に従事。熊本の復興支援活動に積極的に参加し、活動の継続を促す役割を果たした。現在は、熊本の復興支援活動の継続を促す役割を果たしている。</p>	<p>佐藤 忍 氏</p> <p>YMCA</p> <p>熊本YMCA 元山崎地区センター。熊本地震発生後、被災地入り。活動の継続を促す役割を果たした。現在は、熊本の復興支援活動の継続を促す役割を果たしている。</p>	<p>宮崎 律子 氏</p> <p>熊本YMCA 元山崎地区センター。熊本地震発生後、被災地入り。活動の継続を促す役割を果たした。現在は、熊本の復興支援活動の継続を促す役割を果たしている。</p>	<p>関 嘉寛 氏</p> <p>熊本地震発生後、被災地入り。活動の継続を促す役割を果たした。現在は、熊本の復興支援活動の継続を促す役割を果たしている。</p>	<p>堀之内 有希 氏</p> <p>2018年度～2019年度ニューズ編集長・学生ボランティア活動支援室長。熊本の復興支援活動に積極的に参加し、活動の継続を促す役割を果たした。現在は、熊本の復興支援活動の継続を促す役割を果たしている。</p>
--	--	---	---	---

現地ボランティア参加学生も登場します

オプション企画 (16:30~17:00)
現地ボランティア参加者 大交流会
第1回～16回の熊本地震現地ボランティア参加者に向けた交流会です。現地の住民さんも交えて、一緒にお話しませんか？在校生だけでなく、卒業生もぜひご参加ください！

チラシ裏面に記載のフォームへの申込フォームにて参加申し込み可能です。
応募人数の多い場合は抽選による参加となります。

神戸新聞 阪神版：2021. 9. 14 発行

熊本地震被災地支援の関学大 4年間の活動を振り返る



現地で支援活動をする学生（関西学院大学提供）

来月、オンラインフォーラム

関西学院大学は10月9日、熊本地震の被災地で4年間続けてきた支援活動を振り返る「災害支援フォーラム」をオンラインで開催する。継続的な支援によって生まれた関学大と被災地との関係などについて語り合う。

関学大ボランティア活動

フォーラムは4部に分かれ、支援活動を体験した学生と卒業生の報告会や、兵庫県立大学の室崎益雄教授をはじめとした有識者たちによる討論会を企画している。視聴者参加型の意見交換会もあり、支援する側、される側の関係を超えた「新たな支援の形」などを話し合う。

午後1時半～4時15分。

参加無料。定員300人。10月6日まで
にインターネット上で申し込みが必要。QRコード。同センターヒューマン・サービス支援室
☎0798・54・6006
(村上貴浩)

読売新聞 朝刊 阪神版：2021. 10. 15 発行

熊本地震被災地 継続支援を議論

関学大がフォーラム

関西学院大（西宮市）は、2016～19年度に学生が取り組んだ熊本地震の被災地支援を振り返り、今後の方策を考えるフォーラム「継続的な活動が生み出した学生と被災者の新たな支援の形」をオンラインで開いた。在校生や卒業生ら約70人が参加した。

関学大では16年4月の地震発生直後に学生たちから相談を受け、被災地のサポートを決定。その年の7月

以降、4年近くの間、16回、延べ約300人が現地訪問などの活動に参加した。

フォーラムで学生たちは、継続した支援で「被災地の人たちとの信頼関係ができた」と振り返った。「防災意識が高まった」という卒業生の女性は、勤務地の東京で7日夜に起きた震度5強の地震の際も、すぐに友人の安否確認などの行動を取れたという。

仮設住宅で支援を受けた熊本県益城町の女性もリポート参加し、「若い皆さんから元気をもらった。この経験を人生の糧にしてもらえたら」と話していた。

ボランティア活動支援センター規程

第1条 関西学院大学に関西学院大学ボランティア活動支援センター（以下「支援センター」という）を置く。

（目的）

第2条 支援センターは、ボランティア活動の支援に関する基本方針を策定する。

（業務）

第3条 支援センターは、前条の目的を達成するため、次の業務を行う。

- 1 本学のボランティア活動に関する施策の企画・立案
- 2 本学のボランティア活動に関する全学的方針の立案及びその方策の推進
- 3 その他、前条の目的を達成するための業務
- 2 前項の事業を推進するために、支援センターにヒューマン・サービス支援室を置く。

（構成）

第4条 支援センターに次の構成員を置く。

- 1 センター長
- 2 センター副長
- 3 センター委員 3名（西宮上ヶ原、西宮聖和、神戸三田各キャンパスから1名）

（センター長）

第5条 センター長は支援センターを代表し、第3条に規定する事項について統括する。

- 2 センター長は副学長の中から、学長が任命する。
- 3 センター長の任期は1年とする。ただし、再任を妨げない。なお、センター長が任期の途中で退任したとき、新任者の任期は前任者の任期の残存期間とする。

（センター副長）

第6条 センター副長はセンター長を補佐する。センター長に事故あるとき、又はセンター長が欠けたときは、その職務を代行する。

- 2 センター副長は本学専任教員の中からセンター長が推薦し、学長が任命する。
- 3 センター副長の任期は1年とする。ただし、再任を妨げない。なお、センター副長が任期の途中で退任したとき、新任者の任期は前任者の任期の残存期間とする。

（センター委員）

第7条 センター委員はセンター長及びセンター副長を補佐する。

2 センター委員は本学専任教員の中からセンター長が推薦し、学長が任命する。

3 センター委員の任期は1年とする。ただし、再任を妨げない。なお、センター委員が任期の途中で退任したとき、新任者の任期は前任者の任期の残存期間とする。

（センター会議）

第8条 ボランティア活動の支援に関する基本方針を定め、それに基づいて、ボランティア活動を評価し管理するため、センター会議を置く。

2 センター会議は次の委員をもって構成する。

- 1 センター長
- 2 センター副長
- 3 センター委員
- 4 大学宗教主事
- 5 学長補佐 1名
- 6 学生活動支援機構長補佐 1名
- 7 大学事務統轄
- 8 大学課長
- 9 学長が必要と認めた者 若干名

3 センター会議は、副学長が招集し、議長となる。

4 センター会議が必要と認めたときは、センター会議の議を経てセンター会議委員以外の者を出席させることができる。

第9条 センター会議は、次の事項を協議する。

- 1 本学のボランティア活動に関する施策の企画・立案
- 2 本学のボランティア活動に関する全学的方針の立案及びその方策の推進
- 3 支援センター予算・決算に関する事項
- 4 支援センター諸規程に関する事項
- 5 ヒューマン・サービス支援室の人事に関する事項

（規程の改廃）

第10条 この規程の改廃は、センター会議の議を経て大学評議会で決定する。

附 則

- 1 この規程は、2016年（平成28年）4月1日から施行する。
- 2 この規程は、2018年（平成30年）4月1日から施行する。

ヒューマン・サービス支援室規程

第1条 この規程は、関西学院大学ボランティア活動支援センター（以下「支援センター」という）規程第3条第2項に基づき、ヒューマン・サービス支援室（以下「支援室」という）について定める。

（目的）

第2条 支援室は、ボランティア活動の支援に関する基本方針に基づき、学生等によるボランティア活動を支援し促進することを目的とする。

（業務）

第3条 支援室は、前条の目的を達成するため、次の業務を行う。

- 1 ボランティア活動への支援・助言
- 2 ボランティア活動に関する情報収集と提供
- 3 ボランティア活動への啓発
- 4 ボランティア活動に関する評価及びそれに伴う公表
- 5 ボランティア活動協議会の開催
- 6 その他、前条の目的を達成するための業務

（構成）

第4条 支援室に次の構成員を置く。

- 1 室長
- 2 副室長 3名
- 3 ボランティアコーディネータ
- 2 室長は、支援センター副長が兼ねる
- 3 副室長は、支援センター委員が兼ねる

（室長）

第5条 室長は支援室を代表し、第3条に規定する事項について統括する。

- 2 室長は本学専任教員の中から支援センター長が推薦し、学長が任命する。
- 3 室長の任期は1年とする。ただし、再任を妨げない。なお、室長が任期の途中で退任したとき、新任者の任期は前任者の任期の残存期間とする。

（副室長）

第6条 副室長は室長を補佐する。室長に事故あるとき、又は室長が欠けたときは、その職務を代行する。

- 2 副室長はボランティアに関する知識を有する本学専任教員とし、支援室長が推薦し、学長が任命する。
- 3 副室長の任期は1年とする。ただし、再任を妨げない。なお、副室長が任期の途中で退任したとき、新任者の任期は前任者の任期の残存期間とする。

（ボランティアコーディネータ）

第7条 ボランティアの全学的な推進と調整を行うため、支援室にボランティアコーディネータを置く。

- 2 ボランティアコーディネータは室長が推薦した者を、支援センター長が任命・委嘱する。
- 3 ボランティアコーディネータの任期は1年とする。ただし、再任を妨げない。なお、ボランティアコーディネータが任期の途中で退任したとき、新任者の任期は前任者の任期の残存期間とする。

4 ボランティアコーディネータは学生コーディネータを助言指導する。

（学生コーディネータ）

第8条 ボランティア活動支援センター長はヒューマン・サービス支援室の業務の遂行にあたって、参加・協力する学生に対し学生コーディネータを委嘱することができる。

- 2 学生コーディネータはヒューマン・サービス支援室と協働し、ボランティア紹介とボランティア啓発活動を実施する。

（支援室運営委員会）

第9条 支援室の円滑な運営を図るため、支援室運営委員会（以下「運営委員会」という）を置く。

- 2 運営委員会は次の委員をもって講成する。

- 1 室長
- 2 副室長
- 3 学長補佐 1名
- 4 学生活動支援機構長補佐 1名
- 5 大学課長

3 運営委員会は、室長が招集し、議長となる。

4 運営委員会が必要と認めたときは、運営委員会の議を経て運営委員以外の者を出席させることができる。

第10条 運営委員会は、次の事項を企画・立案し、支援センター会議に提案する。

- 1 ボランティア活動への支援・助言
- 2 ボランティア活動に関する情報収集と提供
- 3 ボランティア活動への啓発
- 4 ボランティア活動に関する評価及びそれに伴う公表
- 5 ボランティア活動協議会の開催
- 6 その他、前条の目的を達成するための業務

（協議会）

第11条 室長は、関西学院大学で活動するボランティア団体の交流・協働を促進するため、室長、副室長による協議会を置き、開催する。

（規程の改廃）

第12条 この規程の改廃は、運営委員会の議を経て大学評議会で決定する。

附 則

- 1 この規程は、2016年（平成28年）4月1日から施行する。
- 2 この規程は、2018年（平成30年）4月1日から施行する。
- 3 この規程は、2019年（平成31年）4月1日から改正施行する。

了解事項

ボランティアコーディネータは期限付契約職員とする。

ボランティア活動支援センター名簿

ボランティア活動支援センター長 富田 宏治（法学部教授・副学長）	ボランティアコーディネーター 岡 秀和
ボランティア活動支援センター副長 関 嘉寛（社会学部教授）	小林 真綾
ボランティア活動支援センター委員 川島 恵美（人間福祉学部准教授） 岩坂 二規（教育学部准教授） 李 政元（総合政策学部教授）	

ヒューマン・サービス支援室名簿

ヒューマン・サービス支援室長 関 嘉寛（社会学部教授）	ボランティアコーディネーター 岡 秀和
ヒューマン・サービス支援室副室長 川島 恵美（人間福祉学部准教授） 岩坂 二規（教育学部准教授） 李 政元（総合政策学部教授）	小林 真綾

2021年度 学生コーディネーター代表部名簿

〈西宮上ヶ原キャンパス〉 代 表：墨谷 遼介（法学部 3年） 副代表：小川 結（経済学部 3年） 濱本 杏奈（経済学部 3年）	〈神戸三田キャンパス〉 共同代表：赤畑 清花（総合政策学部 3年） 井吹 未奈（理工学部 3年）
--	--

2021 年度
関西学院大学ボランティア活動支援センター
ヒューマン・サービス支援室 活動報告書
2022 年 12 月 発行

関西学院大学ボランティア活動支援センター
ヒューマン・サービス支援室

〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町 1-155

TEL: 0798-54-6061 FAX: 0798-54-6161

E-mail: kg.hssso.info@kwansei.ac.jp

URL: https://www.kwansei.ac.jp/c_volunteer/